杉田定一

1851年～1929年

政治家。自由民権運動※に奔走し自由党の結成に参画。衆議院・貴族院議員。北海道庁長官、衆議院議長。

どんな子だった？

豪農の家に生まれ、教育熱心な父に育てられる

鶉村波寄（福井市波寄町）の杉田家は、越前で屈指の大庄屋で、父の仙十郎は治水工事に力を尽くし、また、屋敷内に学校を設けるなど、地域の発展に貢献した人物でした。その長男として生まれた定一は、4歳の時に母を亡くし、教育熱心な父に育てられながら、その影響を大きく受けて成長します。

定一は10歳の時、三国の瀧谷寺で道雅上人に学んだ後、府中（越前市）の松井耕雪P118参照や、福井藩の吉田東篁P96参照のもとに入門。その後、明治元（1868）年からは、大阪でオランダ人から理化学を習い、さらに横浜や東京に出て福井藩出身の洋学者の塾に入り、英語やドイツ語、理化学を学びました。

episode 1

正義感と信念を貫いた自由民権運動の指導者

定一が最初に政治活動を始めたのは、明治8（1875）年のことでした。定一は東京で同士たちと新聞を創刊。その紙上で、薩摩や長州の出身者による藩閥政治を批判して投獄され、ほどなく釈放されても、また批判し、再び投獄されるという情熱に満ちた青年でした。また、その頃、土佐に赴いて板垣退助に会い、板垣の愛国社再興に関わるようになります。愛国社は、自由民権運動の中核となった政治結社で、かつて政府に「民撰議院設立建白書」を提出し、その建白書には福井出身の由利公正P126参照も署名していました。

そうした愛国社の活動を通じ、定一は板垣退助と深く交わり、次第に自由民権運動のリーダー的な役割を担っていきます。

明治12（1879）年の初め頃、波寄村に戻った定一は、父とともに地租軽減の運動を起こし、村に政治結社を設立。それは当初、勉強会というかたちの組織でスタートしました。その趣旨は次のようなものでした。

「一棟の校舎を故郷の波寄村に設けて自郷学舎と命名し、同郷の人を集めて、人間の真理や天下の正しい道を追求して磨くことで、知識や気力を向上させ、人間が本来与えられている自由の権利を広め、富強の国家社会をつくる一助にしたいと考えるものである」

《『福井県史』通史編5近現代一第一章より要約》

ゆかりの地
（県内）福井市　小浜市
（県外）東京都

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

定一は、勉強会を「自郷学舎」と名づけ、それを基盤にして翌月に政治結社「自郷社」を結成。越前の自由民権運動は、地租軽減の運動と相まって、波寄村から全域に波及し、定一は入獄を繰り返しながら、自由民権運動の旗頭として、多くの人々の支持を得ていきました。

明治14（1881）年、嶺北と嶺南をあわせた福井県が誕生し、その4月に初の県議会議員選挙が行われると、定一は立候補して当選。29歳の若さで副議長に就任します。

また、明治23（1890）年には、初の衆議院議員選挙に出馬し、9割近くという驚くべき支持率で当選しました。衆議院議員選挙には9回の当選を果たし、北海道庁長官、衆議員議長、政友会の総務委員長や幹事長を歴任。また、その間、農民の租税軽減や、九頭竜川などの改修工事、金津と三国間の鉄道敷設など、故郷のために力を尽くし、九頭竜川の改修では、11年にも及ぶ大工事に、莫大な私財を投入しました。

episode 2

政治に財産を全て投げ打った親子

自由民権運動で歴史に名を刻んだ定一の活躍には、父の存在が大きく関わっていました。父は資金面と精神面の両方で定一を支え、この父がいたからこそ定一が活躍できたともいわれます。

豪農であった仙十郎は、その財産を惜しげもなく政治運動の資金につぎ込みました。土地を次々と売却する仙十郎に、親戚が心配して注意をすると、大声で反論したといいます。

「今は国家の危機の時じゃ、息子の定一はいうにたらないが、しかし、定一は今この国家の雨もりを修繕しているのじゃ。国家の雨もりを直すためにわしが金を出すのが何んで悪いのか。わしは祖先の田畑を定一に出しているのではない。国家の大普請のために出しているのだから、少しも惜しくない。」

《青少年育成福井県民会議編『若越山脈』第1集より》

仙十郎は若い頃、国の将来を真剣に考えて意見書を藩に出したほどの愛国心と正義感が強い人でした。定一もまた父と同じ気質を持ち、晩年に自らを語った言葉は、それを象徴するものでした。

山の高きを欲せず　地の低きをいとわず　誠の存するところ
これ鶉山の立つところである

《福井新聞社編『20世紀ふくい群像』上より》

昭和4（1929）年、定一は79歳で生涯を閉じます。私欲を持たず、まじめ一本で政治の世界に生きた定一でしたが、大庄屋の杉田家は、政治と故郷の発展のために財産を使い果たし、屋敷も含めて全てを失いました。現在、生家跡周辺には墓と顕彰碑などが残り、その遺徳を偲ばせています。

※自由民権運動…明治時代の前期、自由と権利を要求して行われた政治運動。

check for 杉田 定一

池内啓『杉田定一翁』杉田定一顕彰会
家近良樹『ある豪農一家の近代』講談社
笠島清治『農民の心で一生を貫いた大政治家杉田定一先生』杉田鶉山翁遺徳顕彰会
『福井県史』通史編5 近現代一　福井県
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第Ⅰ集　青少年育成福井県民会議
『20世紀ふくい群像』上　福井新聞社
『これき人物シリーズ5　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

晩年に定一は少年時代を振り返り、瀧谷寺の道雅上人から尊皇攘夷思想を学び、吉田東篁から忠君愛国の大義を学んだことが、自分の生涯を支配したと述べています。その思想が板垣退助と一緒に行なった自由民権運動の原動力となっていたのでした。

矢代操（やしろ みさお）

1852年～1891年

鯖江藩を代表して貢進生（こうしんせい）に抜擢される。法学者（民法※）となり日本の近代法学の草創期に活躍。明治法律学校（明治大学）の創立者。

どんな子だった？

13歳で鯖江藩校「進徳館」の素読（※そどく）係を命じられる

矢代操は、黒船来航前年の嘉永5（1852）年、鯖江藩勘定方の松本伝吾家に生まれました。9歳の時に藩校進徳館に入学。成績はきわめて優秀で、13歳のときには教官に準ずる素読係を命じられました。

明治2（1869）年8月、同じく鯖江藩士であった矢代家の養子となりました。これからの鯖江藩を支えていくことを期待されていたのです。しかし、この年の1月に、明治新政府が各藩に対して土地と人民の支配権を朝廷に返上させた版籍奉還が実施されており、矢代少年の前に、新しい時代のうねりが待ち受けていたのでした。

episode 1

鯖江藩を代表して貢進生に選ばれる

操が矢代家の養子となった翌年の明治3（1870）年、新政府は貢進生制度をつくり、近代日本の担い手となるべき優秀な若者を全国から選抜しました。その貢進生に、鯖江藩からただ1人選ばれたのが操でした。このことが操の人生を方向づける大きな転機となりました。

その年の10月、操は上京して大学南校（東京大学）に入学。操のように全国から集められた約350人の貢進生は、イギリスやアメリカ、フランス、ドイツから招聘（しょうへい）した教官に、語学や法律学などを学びました。学生たちは、出身藩の名誉も背負いながら、学業を競い合って努力したといいます。

この制度は間もなく廃止されましたが、学問を続けたいと考えた操は、明治7（1874）年、法務官僚養成学校の明法寮（めいほうりょう）に入学。この学校で旧鳥取藩出身の岸本辰雄、旧天童藩（山形県）出身の宮城浩蔵と意気投合して親しくなります。これが後に明治法律学校を設立することになる3人の出会いでした。

明法寮で外国人教師からフランスの法学を学んだ彼らは、その後、それぞれの道を歩み、操は元老院（※げんろういん）に就職し、その傍ら法律の私塾「講法学社」で教えていました。一方、岸本と宮城はフランスへ留学した後、岸本は判事に、宮城は検事になりました。

異なる道に進んだ3人でしたが、やがて同じ目的を見いだしていきます。それは、青年に法律を教える学校をつくろうとい

ゆかりの地
（県内）鯖江市
（県外）東京都

写真提供：明治大学史資料センター所蔵

うものでした。西欧の考え方を取り入れた国家づくりが進む明治初期、3人は法律を軸とした理想の国家像を思い描き、法律の教育機関が重要であると考え、その実現に向けてともに歩み始めます。

episode 2

明治法律学校をつくる

私立の法律学校をつくるためには用地や資金の確保、学生の募集など、様々な困難が待っていました。しかし、3人は懸命に奔走し、明治13（1880）年12月、3人の連名で「明治法律学校設立上申書」を提出。ほどなく学校設立の許可が下り、明治14（1881）年1月には、ついに法律学校を旧島原藩（長崎県）の上屋敷跡（東京都千代田区有楽町）に開校しました。操と宮城が28歳、岸本が29歳の時のことでした。

明治法律学校では、フランス法学を中心とする近代法学の普及をめざし、矢代は民法を担当していました。こうした明治法律学校の創立に関し、当時の『東京日日新聞』は、「明治法律学校が無事開校されたのは、矢代操が一人あちこちを走り回り、世話したからだ。」と報じています。矢代は、学校では教官（教育者）として、熱心に学生指導にあたり、また民法の研究家として優れた実績を残し、そして学校の経営者としても優れていました。しかし、学校の運営には苦労し、矢代は給料を返上したり、私財（しざい）を投入したりして、学校のためにつくしました。また、彼を支えた家族も大変苦労したようです。

《鯖江市教育委員会文化課『さばえ人物ものがたり（上巻）』より》

開校後も資金難には苦しめられましたが、入学を志願する若者は増加の一途をたどります。その背景には、自由民権思想の高まりがありました。「権利自由」を校訓に掲げてフランス法を教える明治法律学校に、志を持つ多くの若者が注目したのです。学生が増えて校舎が次第に手狭になったため、明治19（1886）年、明治法律学校は神田南甲賀町に新築移転しました。

学校経営がある程度軌道に乗ると、操は貴族院や衆議院の事務局で法律作成の仕事を担当しました。そして、明治23（1890）年には貴族院の要職に就き、将来を期待される中、病魔に倒れ、明治24（1891）年4月、39歳という若さでこの世を去りました。18歳で西欧の法律と初めて出会って以降、日本の近代化に不可欠な法律の整備を加速させながら、激動の時代を情熱一筋に駆け抜けた生涯だったと言えるでしょう。

操が創設と運営に力を尽くした明治法律学校は、日本の法律教育のパイオニアとなり、大正9（1920）年4月1日、明治大学と名を改め、現在に至っています。明治大学構内と故郷の福井県鯖江市にあるまなべの館には、操の功績を称える胸像が建てられています。

※民法…個人の権利・義務など市民相互の生活上の法律関係を規律する法のひとつ。
※素読…漢文などを声に出して読むこと。暗記して読みあげること。
※元老院…明治初期の立法機関。帝国議会の開設により廃止。

check for 矢代 操

『さばえ人物ものがたり（上巻）』鯖江市教育委員会文化課
『明治大学創始者　矢代　操』矢代操先生胸像建設実行委員会

こぼれ話　貢進生で選抜された学生たちは大学南校（後の東京大学）で学び、その中でも特に優秀な学生が明治8（1875）年から翌年にかけて海外留学生として派遣されました。岸本辰雄や宮城浩蔵は留学生に選ばれましたが、体が弱かった矢代操は選ばれず元老院に就職します。矢代が帰国した岸本らに再会するのは4年後のことでした。

松旭斎天一（しょうきょくさいてんいち）

1853年～1912年

日本の近代奇術※の創始者。大がかりな舞台奇術を創作し国内外で好評を博す。今に続く松旭斎一門の初代。

どんな子だった？

人を驚かせることが大好きで、手に負えないいたずら小僧

ペリー来航と同じ年、天一は福井藩士牧野海平の8番目の子として、福井城下で生まれました。本名は牧野八之助（まきのはちのすけ）、後に服部松旭（はっとりしょうきょく）と名を変えています。

天一は幼い頃、阿波国（あわのくに）（徳島県）の寺に小僧として預けられますが、人を驚かすことが大好きで度を超えたいたずらを繰り返し、寺を追い出されてしまいました。両親が早くに亡くなり、頼る人のいない天一は、その後、15歳で放浪の旅に出て旅芸人の一座と出会い、一座に加わって巡業の旅をする中で奇術（手品）を覚え、奇術師となりました。そして、西洋奇術と出会ったことで、天一は世界的な奇術師にまでのぼり詰めてゆきます。

episode 1

大がかりで斬新な舞台奇術をつくった天才奇術師

明治のはじめ頃、天一は西洋奇術を覚え、それをもとに独自の奇術を作り上げました。それまでの見世物小屋や大道芸の出し物とは異なり、大がかりな舞台や印象的な衣装など、演出を凝らした天一の奇術は一世を風靡（ふうび）し、近代的な舞台奇術の草創（そうせい）期を築いていきます。そんな天一の少年時代のエピソードに、人を驚かせる才能の一端をうかがわせるような話があります。

昌住寺の本堂は十間四方、棟瓦の高さは一メートル以上もある豪壮な建築ですが、小僧時代の天一はこの棟瓦の上でときどき逆立ちをしたそうです。もし倒れても屋根の上に大の字になって途中で止まり、決して下までは転げ落ちず、にこにこしながら立ち上がるので、村の人はその身軽な動作にびっくりしたということです。そのころエジャナイカというはだか踊りが流行したときも、天一は庫裡の鬼瓦から花火を爆発させたり、御幣を降らせたりして村人を驚かせたそうです。ある日、未明に本堂から二メートルもある大きな打ち敷きをかぶり、本堂の賽銭を集めては道路に撒きちらし、天から降ってきたといって村人を騒がせたこともありました。

《青園謙三郎著『奇術師一代 松旭斎天一の生涯』より》

人を驚かせることが大好きな少年は、旅芸人との出会いから奇術師となり、やがて西洋の奇術の世界に入っていきます。天一は大阪の見世物小屋で初めてそれを見て感動し、アメリカ人のジョネスから西洋奇術を学びました。

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）徳島県　長崎県　大阪府　東京都

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

その後、独立して松旭斎天一と名乗り、日本の奇術と西洋の奇術を合わせた奇術をあみ出します。水芸、空中浮遊、大砲芸など、大がかりで斬新な天一の奇術は見る者の目を奪い、大評判となります。明治21（1888）年には初めて東京に進出。当時一番の劇場といわれた文楽座で2か月間満員を記録するほど人気を博し、天皇や皇族、大臣にも奇術を披露しました。また、数年後には、生まれ故郷の福井市での初公演を果たし、故郷に錦を飾るとともに、貧しい人々に米を寄付しています。幼い頃から貧しさを経験してきた天一は、この時の福井だけでなく、折りに触れて寄付を行なっていました。

episode 2

アメリカやヨーロッパでも大成功

日本各地で成功を収めた天一が次に夢見たのは、世界の舞台でした。明治32（1899）年、48歳の時に渡米し、言葉や文化の違いに苦労しながらも演目に工夫を凝らし、日本風の衣装を着て独自の世界を作り上げた奇術を披露。天一の舞台奇術は大好評となり、それを機にアメリカだけでなくヨーロッパにまで遠征を果たしています。アメリカでの興行の際には、こんなこともありました。

天一らはニューヨークで日本大使館主催の夕食会に招かれた。総理大臣をやめた伊藤博文が、アメリカのエール大学創立二百年記念式典に出席したので、そのときニューヨークにいた日本人らも招かれたわけである。伊藤博文は集まった日本人たちを前にいばっていた。多くの日本人たちは、伊藤博文の前で「閣下」「閣下」と持ち上げていた。この光景を天一はにがにがしく思っていた。

「おれも日本人なら、伊藤博文も日本人の一人じゃないか。おれは日本一の奇術師だ」

という気持ちでいたところへ伊藤博文が、

「貴様一ぱい飲め」

とさかづきを出した。天一はぐいと飲みほすと伊藤博文に向かって、

「おい伊藤、貴様も一ぱい飲め。」

といった。その場にいた人々はびっくりして、どうなることかと青くなった。しかし、さすがは大人物の元首相。

「わしを呼び捨てにするのは、日本広しといっても天一ぐらいなものだ。」

と感心したという。そして直ちに筆をとって、

「妙術驚天下　為天一師　博文」

と書いて与えた。この書はいま福井市郷土歴史館に保存されている。

《青少年育成福井県民会議編『若越山脈』第2集より》

明治38（1905）年、足かけ5年に及ぶ欧米での興行から帰国した天一は、再び一座を編成して日本全国を興行。一座は大当たりを続けました。天一は58歳の時に体調を崩して引退し、翌年に亡くなり、松旭斎の名は弟子たちに引き継がれますが、その後、一座は分裂。美貌の女性やマジシャンとして活躍した天勝の一座は、宝塚歌劇団のモデルともいわれます。また、敦賀出身の天洋はデパートで手品グッズの販売に成功。手品やゲームなどの専門メーカーとして知られるテンヨーは、天洋の息子が創設したものです。

※奇術…手品、マジック。

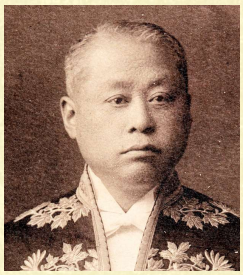
check for 松旭斎 天一

青園謙三郎『奇術師一代　松旭斎天一の生涯』品川書店
藤山新太郎『天一一代　明治のスーパーマジシャン』NTT 出版
丸川賀世子『奇術師誕生』新潮社
『20 世紀ふくい群像』上　福井新聞社
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第 2 集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ 5　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

天一が大仕掛けの奇術に成功した背景には、西洋奇術はもとより、様々な西洋文明がやってきた時代であったことも大きく影響しています。東京に劇場ができ、また、劇場内にガス灯がつけられ、天一は、そうした場所に合う出し物を考えたのでした。

丸木利陽（まるきりよう）



1854年～1923年

天皇をはじめ歴史に名を残す人々の肖像写真を撮影した御用（※ごよう）写真師。採光法の考案や子弟の育成など日本の写真草創期の発展に貢献。

どんな子だった？

近所でも評判の親孝行な子ども

利陽は幼い頃の名を竹内惣太郎といい、嘉永7（1854）年4月14日、福井城下（福井市松本4丁目）に生まれました。

『丸木利陽伝』によると、西別院（西本願寺福井別院）の奉納勘定方をしていた父に、冬の吹雪の中、焼きたてのサツマイモを届けるなど、親孝行な子どもであったといいます。

明治維新を迎え、日本に西欧文明が怒濤（どとう）のように押し寄せた時代に、惣太郎は多感な少年期を過ごしています。それは惣太郎に限らず人々が西欧の進んだ文明に目を見張らせ、夢を描いた時代でした。文明開化が惣太郎の心に与えた影響は、決して少なくなかったと言えるでしょう。

episode 1

文明開化まっただ中の東京で、写真の技術を習得

何歳の時なのかは不明ですが、惣太郎は福井藩士であった丸木利平に人柄を見込まれ、丸木家の婿養子に入りました。ところが、文明開化まっただ中の東京に出て一旗揚げようと考えたのか、22歳の時、妻を福井に残して上京。東京に着いた惣太郎が選んだのは、写真師（カメラマン）となる道でした。写真がまだ珍しかった当時、西欧の技術を使いこなす写真師は、最先端の職業でした。惣太郎は二見朝隈（ふたみあさま）の写真館に入門し、朝隈の弟である朝陽の指導のもと5年間にわたり技術を学びます。そして、明治13（1880）年、写真師として独立。現在の霞ヶ関1丁目に写真館を開業し、師である朝陽のから「陽」の一文字をもらい、名前を利陽と改めました。写真の需要が増え始める中、利陽の写真館は人気が出て、軍人や若い官僚、華族を中心に多くの客が訪れるようになります。

利陽の写真についてまとめた著書『皇族元勲と明治人のアルバム』は、当時の『東京商工博覧絵　第一編』に掲載された図から、その写真館について次のように解説しています。

写真館は木造の一部2階建ての建物で、写場は屋根の一部がガラス張りとなっており、このスラントより自然光を取り入れて撮影を行っている。弟子の米村は当時のことについて「写真所はいたく狭小なる平家なりしも、技術優秀を以て先客万来、特に陸海軍士官に高評を博し名声は日を追うて高まる」と述べ

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都

写真提供：丸木眞二氏蔵　福井県立歴史博物館提供

ている。

episode 2

天皇や皇族の撮影を任された御用写真師

明治20（1887）年、利陽が天皇の写真師となる最初のきっかけが訪れます。その年、後の大正天皇が近衛師団を訪れた際の集合写真を撮影。そして、翌年の明治21（1888）年、政府からたいへん名誉な仕事を依頼されます。それはイタリア人画家が描いた明治天皇の肖像画を写真撮影し、御真影（※ごしんえい）を製作するというものでした。さらに翌年には、明治天皇の皇后の写真を撮影。利陽による明治天皇の御真影と皇后の写真は、後に2枚を並べたものが国内外に広まりました。

皇后の写真を撮影した同じ年、利陽は、それまでの写真館の隣に堂々とした石造りの写真館を建設しています。1階には、応接間と暗室などの作業室があり、2階の写場（写真スタジオ）には自然光を取り入れる天窓だけでなく、独自に開発した照明器具も揃えてありました。また、研究熱心な利陽は、開業後も最新の照明法を次々に取り入れています。人物を浮き立つように見せるレンブラント採光法や、光源を2つ用いるダブルライトなどを使い、目鼻立ちを際出させながら上品な雰囲気を出す利陽の写真は、上流階級に好まれました。新しい写真館では、皇族や華族、政治家、学者など、社会的地位の高い客がますます増えていきました。

利陽が撮影した写真は大半が肖像写真でした。伊藤博文や山県有朋、松方正義、井上馨、板垣退助、福沢諭吉ほか、歴史の本などで目にする写真には、利陽による写真がたくさんあります。例えば、かつての千円札の伊藤博文、五百円札の板垣退助の肖像も明治30年代に撮影されたものでした。

大正2（1913）年には、宮内省調度寮の嘱託員に任命され、御用写真師として、大正天皇の御真影も撮影しました。それは、福井から夢だけを胸に上京し、写真師一筋で頑張ってきた利陽の人生に輝く最高の栄誉でした。大正12（1923）年、利陽は68歳で他界。同じ年の9月に関東大震災が発生し、丸木写真館は被災を免れたものの復興の都市計画の対象となり閉店しました。

しかし、利陽の技術と情熱は弟子たちに受け継がれていました。利陽は人材の育成にも力を入れていたのです。修行志望者募集の広告を福井で出したこともありました。利陽のもとに写真師を志す若者が全国から集まり、多くの弟子が修行をして巣立っていきました。そうした彼らが東京や地方で写真館を開き、あるいは学校などで後進の指導にあたるなど、日本の写真界の発展を担っていきました。その中には、日本写真文化協会の会長の伊東末太郎、東京美術学校写真科の講師になった前川謙三といった福井県出身者もいました。

※御用写真師…宮中や政府などから公の用務として仕事を任された写真師。
※御真影…高貴な人の肖像写真や肖像画を敬う語。明治から昭和の戦前まで、天皇の写真は御真影と言われた。歴史の書物などでよく目にする軍服姿の明治天皇が利陽による御真影。

《研谷紀夫著『皇族元勲と明治人のアルバム』より》

check for 丸木 利陽

研谷紀夫『皇族元勲と明治人のアルバム』 吉川弘文館
光山香至『丸木利陽伝』 福井PRセンター

こぼれ話

明治39（1906）年に発表された夏目漱石の「坊ちゃん」に「ゴルキが露西亜の文学者で、丸木が芝の写真師で」という一節があります。ゴルキとはロシアの文学者ゴーリキ、丸木は丸木利陽のこと。言葉遊びとして用いられたこの一節からも、丸木写真館が世の中に広く知られていたことがうかがわれます。

和田維四郎（わだつなしろう）

1856年〜1920年

小浜出身、日本初の鉱物学者。鉱業法制の近代化や製鉄の基礎づくりに尽力。書誌学の開拓者としても知られる。

どんな子だった？

満14歳で全国から精鋭が集まる学校へ

維四郎は、小浜藩主酒井家に代々仕える和田家の三男として、若狭国雲浜村（わかさのくにうんぴん）（小浜市）で生まれました。幼名を猪三太（いさんた）、三吉ともいい、幼い頃から秀才と評判の子どもでした。

明治3（1870）年、維四郎は貢進生（こうしんせい）に選ばれ、東京の大学南校（東京大学）に入学します。貢進生とは、日本各地で優秀な若者を選抜し、奨学生として大学南校で洋学を学ばせる制度。入学は数え年16歳以上20歳以下と決められていましたが、群を抜いて優秀な維四郎は、満14歳で選ばれました。その後、大学南校から改編された開成（かいせい）学校の鉱山学科に学び、ドイツ人教師のシェンクから指導を受け、鉱物学の世界に入っていきました。

episode 1

鉱物学発展の礎をつくった先駆者

明治8（1875）年、維四郎が学んでいた開成学校の鉱物学科が廃止されることになりました。学科を変える選択肢もありましたが、維四郎は退学を選びます。ところがその才能を惜しんだシェンクは、学校側に維四郎を教師として推薦。維四郎は19歳の若さで開成学校の助教に抜擢され、また、その年、ドイツ人地質学者のナウマンが来日すると、文部省は開成学校に金石（きんせき）※取調所を設置し、ナウマンと維四郎がその主任を命じられました。

実験器具や標本もほとんどなく教科書もないという状況の中、維四郎は学生たちの教科書として『金石識別表』や『金石学』を出版しました。また、その後に手がけた鉱石学の著書『本邦金石署誌（ほんぽうきんせきりゃくし）』と『晶形学（しょうけいがく）』は、日本の鉱物学発展の礎となりました。

明治11（1878）年、内務省地理局に地質課が発足し、維四郎はそこに移りました。以降、維四郎は長く行政の仕事に携わりながら、近代化を急ぐ日本の産業革命期に、先駆者として大きな役割を果たしていきます。

二十歳代では日本全体の地質を調査し、三十歳代では条例を改正して民間資本に積極的に鉱山を開放、産出量を飛躍的に増やす。八幡製鉄所を立ち上げた四十歳半ばまで全力疾走した。

一八九七（明治三十）年十月和田は製鉄所長官に就任した。八幡に国内で初めて本格的に鉄鋼を生産する官営製鉄所を建設

ゆかりの地
（県内）小浜市
（県外）東京都

写真提供：国立国会図書館所蔵

する。四十一歳の元鉱物学者に日本の近代化への重責がかかった。（中略）

大量生産によるコストダウンを打ちだした意見書を政府に提出。原料も外国からの輸入頼りでなく石炭は国内で自給体制をとる。（中略）

一九〇一年、百六十トン溶鉱炉に火が入った。二十世紀の日本の躍進への希望の火だった。

しかし炉の底に銑鉄がたまり、出口がふさがれるなど最初は十分の一の能力も発揮できなかった。鉄を溶かすためのコークスが不良品で度々作業が止まり、運転開始一年あまりでいったん作業を中断せざるを得なくなった。（中略）

和田にとって初めての挫折だった。四十六歳で辞職した後二度と官職に就かなかった。

《福井新聞社編『20世紀ふくい群像』下より》

episode 2

日本を代表する鉱物標本と古典書籍の収集

製鉄所を辞職後、維四郎は鉱物の研究を再開します。日本各地の地質調査や鉱物の調査・収集の研究成果をまとめ、『日本鉱物誌』や『本邦鉱物標本』などを次々と発刊。また、収集した鉱物標本は約４０００点に及び、それらは現在、世界的にも貴重な「和田コレクション」として保存されています。維四郎の標本収集への思いについて、『和田維四郎 ―日本鉱山学の先駆者』は、次のように解説します。

学生のころ、鉱物標本がなくて苦労したことが身にしみて、大学の鉱物標本購入に尽力したが、彼自身も本邦産の鉱物標本を集めていた。三菱金属鉱業株式会社所有となっているいわゆる「和田コレクション」のもとである。（中略）

『日本鉱物誌』の中で、「採集を企図したるは是等の尊重すべき標本の海外へ流出するの事実を目撃したることを其一因と為しけり」と述べている。

《佐々木享著『和田維四郎 ―日本鉱山学の先駆者―』より要約》

また、維四郎は古典書籍の収集と研究者としても大きな功績を残しています。明治に入ると洋学が一気に盛んになり、明治以前の書籍は居場所をなくす一方でした。放置すれば散逸（さんいつ）してしまうと考えた維四郎は、古い時代の書籍を買い集めるとともに、書籍を科学者の視点で研究し、書誌学を開拓しました。収集した古書籍は、総数４万５０００点以上。重要文化財級の貴重な書籍も多いというそのコレクションは現在も、東洋学専門の図書館などで保管されています。

また、晩年には、同じ若狭出身の佐久間勉（さくまつとむ）P.74参照にまつわるこんなエピソードもあります。

海軍部内で佐久間大尉の記念碑建設の為寄附金を募集した際、名和大将が今少し金が集まれば銅像が建てられるがと、先生に相談された。先生も是非銅像を建てるがよい、不足分は自分が引き受けると言つて、数日の後必要な金額を調達し大将に渡された。

《福井県文化誌刊行会編『我等の郷土と人物』第三巻より》

※金石…鉱物の古い言い方。

check for 和田 維四郎

佐々木享『和田維四郎　ー日本鉱山学の先駆者ー』小浜市立図書館
佐々木享『和田維四郎小伝』三井金属鉱業
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第７集　青少年育成福井県民会議
『我等の郷土と人物』第三巻　福井県文化誌刊行会
福井新聞社編『福井人物風土記　ふくい百年の群像　続』昭和書院
『20 世紀ふくい群像』下　福井新聞社

こぼれ話

維四郎が地質調査所の初代所長を務めていた時、調査所の廃止が決まったことがありました。維四郎は、調査所が日本のすべての産業振興にどれだけ重要であるかを首相に説き、それを聞いた首相は必要性を痛感し、廃止を中止したばかりでなく、地質局に昇格させました。

平瀬作五郎

1856年～1925年

図画教育の草創期に図画教科書を著す。イチョウの生殖に関する研究で花粉から放出され、泳ぎだす精子を発見し植物学の世界的な大発見を成し遂げる。

どんな子だった？

絵が得意な少年は、やがて本格的な写実画の世界へ

作五郎は、安政3（1856）年1月7日、福井藩士平瀬儀作の長男として福井城下の旭地区（日之出）で生まれました。

明治5（1872）年、藩校の明新館（福井県立藤島高校）に入学し、グリフィスにも学んだようです。また、作五郎は入学した頃から絵の技量は群を抜いて優れ、卒業後、同校の図画術の助手に任命されたほどでした。

P168参照

しかし、作五郎の絵への思いは、そこで留まるものではありませんでした。〝もっと正確に描く技術を習得したい〟という強い思いを抱き、写実的な絵を学ぶために上京。約3年の修業を経て、19歳で岐阜県中学校（岐阜県立岐阜高校）に図画教師として赴任しました。そして、写実画をさらに究める人生が始まります。

episode 1

植物学上の世界的な大発見 イチョウの精子

図画教師となった作五郎は高い能力をかわれて、教員を養成する師範学校でも教えるようになりました。この時期、作五郎は写実画の基本を学校で教えるための図画の教科書を数冊著しています。

帝国大学理科大学（東京大学理学部）の初代植物学教授が画工を欲していたことから、作五郎32歳の時、大学の画工に転職。器用で何事にも研究熱心な作五郎は、やがて助手となり、研究ができるようになります。そして、当時の教授のすすめでイチョウの受精の研究を始めます。その研究はたいへん地道なものでした。東京大学の小石川植物園内にあるイチョウの大木から成熟前の銀杏を採集し、剃刀で切片にしてプレパラート標本を作り、顕微鏡を覗く日々。ひたすらイチョウの受精を観察し、それを絵に描き続けました。

成熟期を迎えると、この大イチョウの木に梯子をかけて下枝に櫓を組み、そこへ布団を持ち込み、夜になると提灯を灯し何日も徹夜をし、一定時間ごとにぎんなんを採集した。単にぎんなんを採集するだけなら、園長に頼めばやってくれたが、彼はそれをしなかった。なぜなら、研究をつづけていくなかで、イチョウの受精が極めて微妙で神秘的なものだということを実感していたからだった。

《本間健彦著『イチョウ精子発見の検証 平瀬作五郎の生涯』より》

研究を初めて1年で作五郎はイチョウの花粉内に運動する精

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都　京都府京都市
岐阜県岐阜市

資料提供：寺田和雄氏
写真提供：嶋田正身氏

虫（精子）を発見し、その2年後の明治29（1896）年、ついに花粉から放出され卵細胞に向かって泳ぎだす精子を観察し、その内容を論文に書きました。その論文には正確で詳細な絵を掲載しました。その大発見は海外の研究者から絶賛されました。

イチョウの精子の発見は、当時どのくらいすごいことだったのでしょう。陸上植物のコケ植物やシダ植物は、種子ではなく胞子で繁殖します。コケ植物の場合、胞子が発芽して雄株と雌株となって、それぞれ精子と卵細胞を作って、精子が卵細胞まで泳いで受精します。また、シダ植物は胞子が発芽して前葉体になり、その中で精子と卵細胞ができて受精します。一方、種子で繁殖するイチョウは、当時、裸子植物のマツなどと同様に精子は作らず、運動しない精核と卵細胞が受精して種子ができると考えられていました。ところが、作五郎の研究によってイチョウが精子で受精するということが明らかになり、イチョウが原始的な繁殖様式をとどめていることがわかったのです。このことは、約2億年前の化石が見つかり、現生する植物のなかで最古の部類に入るイチョウが「生きた化石」と言われるもう一つの所以です。

episode 2

平瀬作五郎と池野成一郎

作五郎の研究を語る上で欠かせない人物がいます。のちに帝国大学農科大学（東京大学農学部）の教授となる池野成一郎です。池野は作五郎の10歳年下で、農科大学の助手という立場でした。そして、同じ東京大学の小石川植物園で、ソテツの受精について研究していました。作五郎がイチョウの精子を見つけた後、ソテツも精子で受精することを発見しました。二人は互いの研究について語り合い、助言し合ったのでしょう。作五郎が外国語で論文を書く際には、外国語に堪能だった池野が手伝ったと思われます。また、池野の論文には、作五郎が描いた絵が使われています。共に研究熱心だった作五郎と池野はお互い尊敬し合い、厚い友情で結ばれていたのでしょう。

イチョウの精子の発見後、大学内部の権威主義や嫉妬による批判が起こり、作五郎は発表から1年足らずで大学を辞職。再び滋賀県や京都府の中学教師に戻ります。ところが、最初の論文発表から16年後の作五郎56歳の時、その研究が報われる出来事が起こります。

明治45（1912）年、作五郎と池野が二人そろって、特にすぐれた研究業績に与えられる帝国学士院恩賜賞を受賞することになったのです。当初、作五郎への授与はなかったところを、池野が「平瀬が貰わないなら私も断わる」と言ったことで、共に受賞となったといわれています。

作五郎はイチョウの精子を発見した際、「私は子どもの頃から木登りが得意で、植物園の大イチョウへ簡単に登ることができた」と述べています。また、当時、植物の受精に関する世界的権威のE・シュトラスブルガー（ボン大学・ドイツ）が、受精の詳細を多くの裸子植物で明らかにしており、イチョウも観察していました。しかし、イチョウの精子の発見には至っていませんでした。そのことに対して、作五郎は「シュトラスブルガー博士は西洋剃刀でギンナンを薄く切ったが、私は慣れ親しんでいる日本剃刀を良く砥いで、薄く切ることを試みた。それが成功の要因であった」と述べています。絵や木登りも含めて、子どもの頃から慣れ親しんできたことが、世界的な大発見におおいに貢献していたのでした。

作五郎が研究に没頭したイチョウの木は、今も東京大学の小石川植物園で銀杏を実らせています。

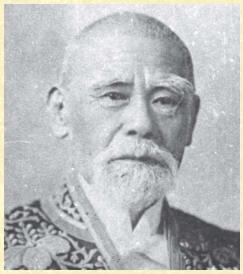
check for 平瀬 作五郎

本間健彦『イチョウ精子発見の検証 平瀬作五郎の生涯』新泉社
小野勇『平瀬作五郎伝』岩波書店
足立尚計『知られざる福井の先人たち』フェニックス出版
長田敏行『イチョウの自然誌と文化史』裳華房．
イチョウ精子発見百周年記念市民国際フォーラム・リポート
『いまなぜイチョウ？』現代書林

こぼれ話

作五郎が受賞した帝国学士院恩賜賞メダルは、作五郎の子孫から福井県教育総合研究所の教育博物館（坂井市）に寄贈され、大切に保管されています

佐々木忠次郎



1857年～1938年

日本の昆虫学、養蚕学の創始者。父の佐々木長淳とともに近代産業の発展に貢献。日本人による初の考古学調査を行う。

どんな子だった？

東京大学でモースに師事し、生物学を学ぶ

忠次郎は、福井藩士であった佐々木長淳（権六）P128参照の長男として、幕末の福井城下（福井市）で生まれました。父の長淳は、機械作りや繊維産業の近代化に貢献した人物としても知られます。

子どもの頃は、福井藩士の中根雪江P92参照に漢学を学び、藩校の明新館（県立藤島高校）に入学。14歳の時に一家で上京してからは、東京の開成学校から東京大学に進学し、動物学者のモースを教授として開設された生物学科の第一期生となります。在学中、忠次郎はモースの大森貝塚（東京都品川区・大田区）の発掘調査を手伝い、その2年後には、学友の飯島魁と陸平貝塚（茨城県稲敷郡美浦村）の発掘調査を行っています。

episode 1

日本人による初の考古学調査と昆虫学の研究

陸平貝塚の発掘調査は、忠次郎が霞ヶ浦の淡水貝類の調査に訪れた際、段々畑に大量の貝殻を見つけたのが始まりでした。その発掘は、日本人の手による初の発掘調査となり、陸平貝塚は日本考古学の原点とされ、現在、国の史跡に指定されています。

たいへん貴重な発見をした忠次郎でしたが、考古学の道へ進むことはなく、大学卒業後は駒場農学校の助教となります。忠次郎による同校での昆虫学の講義は、日本の昆虫学の記念すべきスタートとなりました。

日本において最初に本格的な昆虫学の教育をはじめたのは、東京大学理学部動物学教室の最初の卒業生の一人、佐々木忠次郎である。（中略）

一八八一（明治一四）年に卒業すると直ちに農学校に入り、動物学、昆虫学、養蚕学などを担当するようになる。その後、佐々木は駒場農学校を日本の主要な昆虫学教育機関へと発展させていくのである。《瀬戸口明久著『害虫の誕生―虫からみた日本史』より》

また、忠次郎にまつわる話に、日本の国蝶「オオムラサキ」の学名があります。その学名は、忠次郎の姓「佐々木」を入れた「ササキア・カロンダ・ヒューイットソン」。イギリスの昆虫学者が忠次郎に捧げて名付けました。

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都　茨城県

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

episode 2

父長淳の志を受け継ぎ、情熱を傾けた養蚕の研究

忠次郎の研究は、とくに農産物の害虫や養蚕の分野に際立った功績を残しました。『近代日本生物学者小伝』では、次のように研究成果の一部を紹介しています。

一方、衛生昆虫の方面では、蚊取り線香などに使われてきた除虫菊の移入者の一人であった。外国で除虫菊が虫よけに使われていることを知った彼は、1886（明治19）年、アメリカに出張する知人に依頼して種子を取り寄せた。翌年、生育した植物で除虫効果を確認したので、ある駒場農学校出身者に製粉を頼んだ。そして、その人物が蚤取り粉として売り出し、評判になって種子や苗も広まったという。「除虫菊」の名付け親でもある。ただし、これとは別に、1885（明治18）年に和歌山で栽培が始まっていたようである。

そのほか、タンニンの原料となる虫こぶをつくる五倍子虫などの有用昆虫の研究も行なった。（中略）

1893（明治26）年から数年間農商務省の水産調査委員ならびに水産調査所監督を兼務、その折に真珠の養殖状況を調査し、また自身で半円真珠の作成を試みて成功したなどの事跡もある。

《木原均ほか著『近代日本生物学者小伝』より》

一方、養蚕では、蚕の病気の研究を行っていた父の志を受け継ぎ、丈夫な蚕を育てて品質の高い糸をつくる研究に取り組みます。製糸や織物工業は、当時、国の経済を支える重要な産業でした。忠次郎の研究成果は、そうした近代産業や経済の発展にも貢献するものでした。

佐々木は父・長淳が蚕糸関係の技術者（官吏）であったことも関係して、養蚕上の業績もいろいろある。たとえば、カイコノウジバエの生活史の解明（一八八六）や、微粒子病の研究などである。当時「養蚕の佐々木か佐々木の養蚕か」と称賛されたと伝えられている。そのほか、彼は中国のサクサンやテグスサン（フウサン）など、野生絹糸虫の研究と導入にも尽力していた。

《小西正泰著『虫と人と本と』より》

また、研究熱心な忠次郎は、国の様々な部署からも仕事を依頼されていました。大正10（1921）年に大学を退職した後も、82歳で亡くなるまでの17年間に、約30点もの著述を発表しています。まさに生涯をかけて研究一筋に生きた人でした。

しかし大学教授以外に、彼は文部省、農商務省、大蔵省、台湾総督府その他各方面から学事、実業に関する調査委員を命ぜられ、その肩書きは二十以上にのぼった。このため毎年十数回も出張するなど、ほとんど席のあたたまる日がないくらいだった。

だが彼は専門の研究も決しておろそかにせず、報告書、単行本、学術論文など邦文、外国文の執筆もおどろくべき数に上った。

《福井新聞社編『福井人物風土記〈続〉』より》

check for 佐々木 忠次郎

『佐々木忠次郎博士』佐々木忠次郎先生伝記編纂会
瀬戸口明久『害虫の誕生―虫からみた日本史』筑摩書房
小西正泰『虫と人と本と』創森社
『ふるさと福井の人々』福井市教育委員会
木原均ほか『近代日本生物学者小伝』平河出版社
福井新聞社編『福井人物風土記〈続〉』昭和書院
『これき人物シリーズ5　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

現代の果物園での袋かけも、実は忠次郎の研究に端を発しています。忠次郎は、モモやリンゴなどの果実に潜るモモシンクイガの生態を研究し、その産卵を防止する「袋掛法」を提唱して果樹の害虫対策を推進しました。

大和田荘七（二代目）

1857年～1947年

先見性と行動力をもとに海運、貿易、銀行、鉱山業に着手。得た財力を町の整備や教育に注ぎ込み敦賀の近代化に尽くした事業家。

どんな子だった？

15歳で音読もできなかった少年が抱いた夢は数学者

荘七は明治時代の始まる少し前、敦賀で薬種商を営む山本家の末っ子として誕生しました。子どもの頃の名は亀次郎といい、体が弱かったため寺子屋に通わずに、一人遊びのように算術（算数）だけをしている少年でした。

明治5（1872）年、敦賀に小学校ができると、17歳で小学校に入学。年下の子に混じって勉強を始めますが、最初は音読すら満足にできませんでした。しかし校長先生は、数学の才能を見いだし、自宅へ呼んで様々な学問を教えます。亀次郎は、砂が水を吸い込むように知識を吸収し、とくに数学は高いレベルに達しました。そして、8年の課程を1年半で卒業。亀次郎は、東京で勉強して数学者になることを夢見るようになります。

episode 1

大和田家の養子になり、実業家の道へ

明治11（1878）年、亀次郎は、数学者になる勉強を続けてよいという約束で、海運業を営む大和田家の分家、大和田荘七の養子になります。亀次郎21歳のときのことでした。しかし、その約束は果たされることなく、30歳になると、大和田分家の跡継ぎとして、船荷用の縄や筵を商う家業を任され、名前も養父の名を継いで大和田荘七と改めます。

こうして数学者への夢をあきらめた荘七でしたが、学者を目指して勉強したことで身についた論理的な思考は、家業の商売に活かされていきます。荘七は商品の質を向上させる改革案を練り、まず丈夫な筵の作り方を農家に指導し、敦賀産の筵の商品価値を高めることに成功。そうしてでき上がった筵は次第に評判が良くなり、敦賀の農家にも、大和田家の商いにも利益をもたらしました。

荘七が養子となった頃、敦賀のまちは一つの転換期を迎えていました。敦賀を終点とする日本海側初の鉄道線路の建設が着々と進められ、敦賀の商人たちは期待に湧きます。しかし、荘七の考えは他の商人たちと少し違っていました。

（荷の取り扱い量が増えれば、今の港では対応できないだろう。しかも、一時は良くても、鉄道が敦賀よりさらに北へ伸びれば、北陸や東北、北海道との間の船荷は減り、敦賀の海運は衰退してしまう。そうならないためには、外国も視野に入れた港の運営が重要だ。）

ゆかりの地
（県内）敦賀市
（県外）北海道留萌　大分県別府

写真提供：『北陸の偉人大和田翁』発行　似王堂

そう考えた荘七は、まちの有力者たちを説得して、敦賀と日本の繁栄のために、敦賀港を国際港にする活動に取りかかります。

episode 2

ふるさとのピンチを救い、敦賀近代化の父と呼ばれた荘七

明治17（1884）年に敦賀―長浜間に鉄道が開通すると、確かに、港での取り扱い量は倍増。しかし、しばらくすると荘七の予想どおり、輸送方法が海運から鉄道輸送へと移る兆しを見せます。荘七は、港を国際港にする活動に、さらに力を注ぎ、明治24（1891）年、国への本格的な交渉を開始。また、翌年には、敦賀を大都市と同様の経済のしくみを持つまちにするために、大和田銀行を創設します。荘七は、国際港にするためにも、また、敦賀の経済を発展させるためにも、銀行が必要と以前から考えていたのでした。

明治32（1899）年、荘七の精力的な働きかけが実り、敦賀港は「開港場（外国貿易港）」に指定されます。しかし、皮肉なことに、その同じ年、北陸線が富山まで開通すると、敦賀港の国内船荷は大きく量を減らしました。

荘七は自ら貿易会社を立ち上げ、朝鮮半島から牛や大豆を直輸入し、また、港の整備拡充に財産をつぎ込み、政官界に働きかけながら国際港としてのピンチを救います。その後、東京の新橋駅と敦賀の金ケ崎駅間に、欧亜国際連絡列車が運行し、荘七が心血を注いだ港と敦賀のまちは、ウラジオストクからシベリア鉄道を通じてフランスのパリまで直結する玄関口となったのでした。

昭和2年に竣工した大和田銀行の建物は、現在も市立博物館として利用され、建物の横に置かれた荘七の石像の台座には、次のような顕彰の言葉が記されています。

風貌は温和にして謹厳、人格は高潔にして慎み深く仁徳を備え、聡明で時流を超越し、溢れ出るほどの才気があり、稀にみる武士魂と商才を持つ巨人である。（中略）

産業を興し、進んで社会や公共に尽くし、国事に奔走するのみならず、献金や寄附など善行が多く、明治22年に黄綬褒章、大正5年に藍綬褒章、大正8年には紺綬褒章に表彰された。大和田荘七翁は常に敦賀の発展を胸中に抱き、築港工事の必要を力説し国論の喚起に努めた。

翁はつねに敦賀の開発を胸に抱き、敦賀築港工事の必要性を力説して国論の喚起に努め、ウラジオストクや北朝鮮への直通航路を拓き、海運倉庫業を経営して海外貿易の発展を促し、とくに当町の商工の発達のために商工会議所を創設して初代会頭に選ばれ、銀行米穀取引所を設けて町の発展を図り、あるいは農事の改良を考えて公衆の利益を増やし、また教育産業や救済などの社会公益事業に尽くすなど、当町のために寄与した事績は枚挙に暇がない。（中略）

これは終始一貫、愛郷に誠を尽くし結実したものであり、感激深く感謝の念を持たずにはいられない。よって本町は、町会の決議により大和田荘七翁の銅像を建設し、永遠に功績を顕彰してその偉徳を讃える。昭和7年壬申6月17日　敦賀町長 陸軍少将従四位勲三等功四級 加藤愨次郎記

《敦賀市立博物館敷地内大和田荘七石像碑文より意訳》

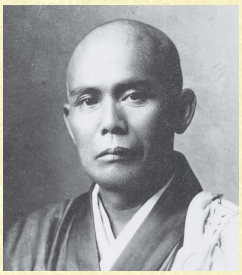
check for 大和田 荘七

『敦賀の歴史』敦賀市
『敦賀市立博物館研究紀要』第25号・9号　敦賀市立博物館
『20世紀ふくい群像』上　福井新聞社
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第2集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ5　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

大和田銀行は、商人が利用しやすいように、他の銀行より為替手数料を安くし、庶民の生活を安定させるため貯蓄も奨励。客に対する態度は腰の低い丁寧なもので、『丁稚銀行』とも呼ばれ、後にそのスタイルは、全国の銀行の模範になっていきます。

釈宗演



1860年～1919年

幼くして臨済宗の僧となり、セイロンなどで仏教の神髄を学ぶ。明治時代に日本の禅と思想を世界に広めた「ZEN」の先駆者。

どんな子だった？

将来を嘱望され、2度も寺にスカウトされた聡明な少年

宗演は、江戸時代の終わり頃、高浜村（大飯高浜郡高浜町）若宮で誕生しました。本名は一瀬常次郎といい、幼い頃は近くの寺で読み書きを習い、その後、小浜の常高寺で修行を始めました。

そして10歳の時、将来を決定づける道へ踏み出します。宗演は、親戚の越渓守謙という臨済宗の高僧に強く請われて、越渓のいる京都の妙心寺に入りました。越渓は宗演の優れた資質を見抜いていたのでした。さらに20歳の頃には、鎌倉円覚寺の洪川宗温から弟子にしたいと望まれ、円覚寺に修行の場を移しました。こうして宗演は、禅宗の一つ臨済宗の僧として成長していきます。

episode 1

禅を学び、西洋を学んだ異色の僧

さまざまなものが西洋から入ってきた明治時代に、それとは逆に日本から西洋に伝えられ、大きな影響を与えたものがありました。それは日本の思想や文化を包括する禅の世界。宗演がアメリカに初めて日本の禅を紹介し、その後、禅は欧米で一大ブームを巻き起こすまでになります。また、禅は日本語の発音のままに、「ZEN」という世界共通の言葉にもなっています。

そうした宗演の足跡を記した伝記からは、聡明で思慮深い宗演の人間像が浮かび上がります。例えば、建仁寺の俊崖和尚のもとで修行をした15歳の時、ある出来事から宗演は心がけるべきあり方を学び取っています。『釈宗演伝』では、そのエピソードをこう伝えています。

おりしも夏の盛りであった。一日、斎後に老師は大方丈へ行かれた。ここが鬼の居ぬ間の洗濯と思うて、両足院の廊下で大の字なりに宰予（孔門十哲）を学んで、鼾声轟々と槐安国へ旅をしておった。ところが老師は間もなく帰院で、老師の居間へはこの廊下が要路じゃ。老師は要路へ来て驚ろかれたらしい、私の無作法に。私もふと目が覚めたけれども、この場合に一気起きぞこなったから知らざるまねして（心ならずも）、寝たふりでいた。すると老師がこの古路に横たわっておる鉄蛇を股げもせず、いと穏やかな調子で、「御免なされ」と、足部の方から通り越して居間へ這入られた。この時の私の心持ちは真に真っ赤であった。而して背汗淋漓とでもいう有様で、この時に人の師

ゆかりの地
（県内）大飯郡高浜町
（県外）京都府　神奈川県　岡山県

写真提供：一瀬芳成氏所蔵

たる心掛けの一端を見た。

《井上禅定著『釈宗演伝』より》

この後、宗演は鎌倉の円覚寺に移り、さらに福沢諭吉が主宰する慶應義塾に入塾。諭吉は、宗演が将来きっと大物になると見込んで注目したといいます。その頃のことを「名僧物語」(三)(『仏教説話大系』第34巻)では、宗演の葛藤とともに次のように伝えています。

――禅は西欧文明に勝てるだろうか……。

僧として独立した自分を、宗演は文明開化の嵐の中にぶつけてみたかった。

明治十八年、宗演は二十七歳で慶応義塾へ入学した。当時、慶応は西欧化主義の急先ぼうであった。宗演は坊主頭に黒い衣を着て学友たちと酒を飲み、持ちまえの地声で議論した。学生の中にはまゆをひそめて塾長に訴える者もあったが、塾長の福沢諭吉は逆にその男をたしなめて言った。

「おまえたちにわかることではない。宗演はすでに禅僧としてひととおりの修行を卒業した男だ。だからこそ堂々と黒衣のまま遊郭へも出かけるのだ。そこらの生臭坊主とはわけが違う」

宗演は慶応義塾で英語を学んだ。そして、学べば学ぶほど欧米文化の強じんさに心を揺らした。

――自分の得た禅は欧米でも通用するのだろうか。通用させるためにはもっと欧米を知らなければならない。ほんとうに欧米を知るにはやはり衣を洋服に着替えなければだめなのではないか……。

《仏教説話大系編集委員会著「名僧物語」(三)(『仏教説話大系』第34巻)より》

episode 2

シカゴでの万国宗教大会で日本の禅を紹介

明治20(1887)年、宗演は福沢諭吉の勧めもあって、仏教をより深く学ぶためにセイロン(スリランカ)へ渡航。帰国の際はインド、タイ、中国を巡り、様々な国における仏教をその目で見て戻ります。

明治25(1892)年、30歳代という異例の若さで円覚寺の管長に就任した宗演は、その翌年、日本仏教界の代表団の団長としてシカゴでの万国宗教大会に出席。宗演による講演は、大きな反響を呼び、また、鈴木大拙が英訳したその原稿は、アメリカの雑誌にも掲載されました。こうして日本の禅は、世界に注目されることとなり、宗演は西洋の哲学者たちとも交流を持つようになります。

また、日本においても、多くの知識人たちが禅の教えを受けようと、宗演のもとにやってきました。その中には、夏目漱石や徳富蘇峰もいました。漱石は小説『門』の中で、宗演から与えられた「父母未生以前の自己如何」(自分とは何か)という命題に触れ、また、蘇峰は「利慾、権勢の外に脱然、超然たりしにあり」(利欲や権力欲が一切なく、世俗に関与せず超然としている)と宗演への尊敬の念を述べています。

※葛藤…心の中に相反する思いなどが起こり、迷うこと。
※命題…解決や究明しなければならない問題。

check for 釈 宗演

『釈宗演　郷土の生んだ明治の高僧』高浜町郷土資料館
井上禅定『釈宗演伝』禅文化研究所
釈宗演『新訳　西遊日記』(井上禅定監修・正木晃訳・山田智信解説)大法輪閣
齋藤孝『音読でこころにしみる菜根譚』イースト・プレス
夏目漱石『門』角川書店
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第3集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ5　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

宗演のセイロン渡航に際しては、政治家・思想家、剣豪として知られる山岡鉄舟も渡航を勧め、福沢諭吉とともに渡航資金の支援もしています。また、学友たちも少しずつお金を出し合い、宗演のセイロン渡航に協力しました。こうしたエピソードからも宗演の人望がうかがわれます。

岡倉天心（おかくらてんしん）

1862年～1913年

フェノロサとともに文化財保護の礎をつくり東京美術学校の創設に尽力。『茶の本』などで日本や東洋の文化を世界に伝えた美術界の先駆者。

どんな子だった？

外国人で賑わう福井藩直営の店と少年時代の天心

天心は、日本が開国して、欧米の商人や外交官で賑わいだした横浜で生まれました。福井藩士の父は、藩の任務として、横浜本町で福井藩の特産品や生糸などを扱う「石川屋」を任されていたのです。

天心は幼名を覚蔵（かくぞう）といい、のちに覚三と改名（天心という名は作家としての号）。8歳の時には、横浜のジェームズ・バラの塾で英語を学び、また、長延寺（ちょうえんじ）（横浜市神奈川区）の住職に論語や孟子などを学びます。塾や父の店で英語に親しんでいた天心は、その後、創立したばかりの東京大学に入学し、英文学を次々と読んで、西洋哲学的な考え方も身につけていきます。

episode 1

近代化の中で荒廃する日本の文化を守りたい

天心は東京大学の文学部に入り、英文学に親しむとともに、漢学、琴、日本画、茶道など、東洋や日本の文化も学んでいきました。そして、この時代に、彼の人生に最大の影響を与えた出会いがありました。明治11（1878）年、アメリカ人のアーネスト・フェノロサが、哲学の教授として来日。その助手と通訳を務めたのが、英語の堪能な天心でした。フェノロサは、細密で美しい日本画や、神秘的な山水画に心を奪われ、骨董（こっとう）店や美術商を訪ねる際に覚三を伴いました。

大学卒業後、文部省に就職した天心は、全国の社寺の調査に携わりました。そして、法隆寺夢殿（ほうりゅうじゆめどの）の救世観音像（くぜかんのん）をフェノロサとともに目にした時、衝撃的なまでの感動を覚えます。この時の調査は、彼の人生に大きく影響し、維新以降の西欧化の波に飲み込まれ、危機的な状況にあった日本文化を守る活動の原点となったのでした。

明治19（1886）年、天心は日本に国立の美術学校をつくるために、フェノロサと欧米の芸術を視察しますが、西洋の優れた芸術を見るにつけ、日本はもっと日本独自の芸術を大切にすべきという考えが強くなります。3年後に東京美術学校（東京芸術大学）が開校しますが、そこには西洋の油絵などの学科はなく、日本画や伝統的な木彫、漆工芸といった日本の芸術の学科だけでした。翌年には、28歳の若さでその二代目校長に就任し、美術界のリーダーとして、横山大観（よこやまたいかん）ほか日本を代表する画家となる若者たちを育てていきます。

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都　茨城県　新潟県
神奈川県横浜市
アメリカ合衆国ボストン市

写真提供：国立大学法人茨城大学所蔵

episode 2

外国で高く評価された日本の美

その後も天心は、日本の美術界を引っ張っていきますが、そのやり方が強引であったため、西洋絵画を学んでいた人々が排斥運動を起こします。ついに覚三は東京美術学校を辞職し、天心を敬愛する教師17名も一緒に学校を去りました。そして、3ヶ月後、天心とその教師たちによる日本美術院という民間団体が誕生。それが現在「院展」で知られる日本美術院の始まりでした。

しかし、反対派はその後も天心たちへの批判を緩めず、大観らが描いた斬新な作品は、悪評の餌食となりました。ところが天心が大切にした日本文化と弟子たちの作品は、日本ではなくアメリカで高い評価を受けます。

天心はボストン美術館（マサチューセッツ州ボストン市）の東洋部長に就任し、日本とアメリカを往復しながら、その間、日本美術院の拠点を茨城県の五浦（北茨城市）に移し、作家の育成に力を入れました。また、日本や東洋の美術や思想を紹介する著書の執筆にも、精力的に取り組み、海外で『東洋の理想』や『日本の覚醒』、『茶の本』など、英文の著書を刊行します。その中から『茶の本』（翻訳本）の第一章「人情の椀」を抜粋して紹介しましょう。

茶道は日常生活の俗事の中に存する美しきものを崇拝することに基づく一種の儀式であって、純粋と調和、相互愛の神秘、社会秩序のローマン主義を諄々と教えるものである。茶道の要義は「不完全なもの」を崇拝するにある。いわゆる人生というこの不可解なもののうちに、何か可能なものを成就しようとするやさしい企てであるから。

茶の原理は普通の意味でいう単なる審美主義ではない。というのは、倫理、宗教と合して、天人に関するわれわれのいっさいの見解を表わしているものであるから。それは衛生学である、清潔をきびしく説くから。それは経済学である、というのは、複雑なぜいたくというよりもむしろ単純のうちに慰安を教えるから。それは精神幾何学である、なんとなれば、宇宙に対するわれわれの比例感を定義するから。それはあらゆるこの道の信者を趣味上の貴族にして、東洋民主主義の真精神を表わしている。

《岡倉天心著　村岡博訳『茶の本』より》

天心の著書は日本でも翻訳され、多くの人に読まれました。誹謗中傷や様々な困難を乗り越えた天心は、美術界の第一人者として、また、中国やインドなど東洋を見つめる思想家として、押しも押されもしないところに登り詰め、50歳で亡くなるまで精力的な活動を続けたのでした。その結果、日本の国際的な評価を高めることになりました。

常に天心は「故郷は福井」と話し、ボストン美術館への履歴書にも越前生まれと記載していました。両親の故郷である福井に、一度も住んだことはなくても、強い愛着を持っていたのです。天心が幼い頃、乳母のつねは福井の話をよく語ってくれたといいます。話の中の福井を思い描き、イメージを心に強く刻んだ天心にとって、福井は生涯にわたる心の故郷となっていたのでしょう。

check for 岡倉 天心

岡倉覚三（天心）『茶の本』岩波書店
岡倉一雄『父岡倉天心』岩波書店
松本清張『岡倉天心』河出書房新社
新井恵美子『岡倉天心物語』神奈川新聞社
大久保喬樹『岡倉天心茶の本』NHK 出版
加来耕三著『これでおしまい　歴史に名を残す人物たちの辞世、最期の言葉』グラフ社
『岡倉天心』（古田亮監修）平凡社
『岡倉天心の生涯』岡倉天心福井県顕彰会　澤村龍馬著
岡倉登志著『岡倉天心思想と行動』吉川弘文館
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第５集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ５　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

明治維新以降、新政府が神道と仏教を区別する政策を打ち立てると、全国で仏像や仏具を破壊する廃仏毀釈運動が広がりました。それに胸を痛めた覚三は、文化財を保護するための団体をつくり、調査や保護活動を始めます。それが下地となって、後の国宝保存法や文化財保護法の制定へと繋がっていきました。

山川登美子

1879年～1909年

明治時代の女流歌人。雑誌『明星』で人気を博し与謝野鉄幹の新詩社に参加。与謝野晶子らと『恋衣』を刊行。

どんな子だった？

良家の子女として生まれ、知性と感性豊かな美少女に成長

登美子は、代々小浜藩に仕えてきた山川家の四女として、遠敷郡竹原村（小浜市）で生まれました。父は旧藩士らと出資してつくった銀行の副頭取を務めており、経済的に恵まれた家庭で両親の愛情を受けて育ちました。

和歌や琴に親しみ、知性を備えた美しい少女に成長した登美子は、大阪の梅花女学校を卒業した後、いったんは郷里に戻りますが、再び大阪に出て母校で研究生として英語を専門的に学びます。そして、与謝野鉄幹が創刊した雑誌『明星』に短歌が掲載されたことを機に、登美子の女流歌人としての人生が始まりました。

episode 1

作品を輝かせたのは、師をめぐる2人の女性の恋

登美子は『明星』に短歌が掲載された後、与謝野鉄幹が主宰する東京新詩社の仲間となります。そして、女流歌人の道を歩み出した登美子の胸の中に、いつしか恋心が芽生えていきます。鉄幹を尊敬する気持ちが、恋心へと変わったのでした。

しかし、鉄幹には妻がいました。さらには登美子の他にも鉄幹に思いを寄せる女性が…。

それは、登美子と同じように『明星』で歌壇デビューした女流歌人の鳳志ようという女性で、後に鉄幹と結婚した与謝野晶子でした。活発で自由奔放な晶子と武家の娘として厳しく育てられた登美子。対照的な性格の2人は、競うかのように鉄幹への恋心を次々と短歌に綴ります。一方、思いを寄せられたほうの鉄幹は、登美子と晶子のそれらの短歌を『明星』に掲載。鉄幹と登美子、鉄幹と晶子、その複雑な感情が入り乱れる人間模様が、明治のロマン主義を代表する2人の作品を生み出したのでした。

■登美子の歌

あたらしくひらきましたる詩の道に君が名讃へ死なむとぞ思ふ

君か手にふれにし日より胸の緒の小琴のしらへたゞにいわれぬ

■晶子の歌

春曙抄に伊勢をかさねてかさ足らぬ枕はやがてくづれけるかな

（県内）小浜市
（県外）大阪府　東京都　京都府

写真提供：山川登美子記念館所蔵

あゝ野の路君とわかれて三十歩また見ぬ顔に似る秋の花

鉄幹と登美子と晶子は3人で旅をしたこともありました。そうした中で晶子が詠んだ短歌には、登美子の才能に対する嫉妬を詠んだものもありました。

君が才をあまり妬しと思ひながら待たるる心神ならで知らじ

それに対して登美子は、自ら恋心に別れを告げ、女流作家としての名声も、愛する鉄幹もすべて晶子に譲ると短歌で告げます。

それとなく紅き花みな友にゆづりそむきて泣きて忘れ草つむ

登美子は親が勧める縁談話を機に、鉄幹への苦しいまでの恋心を断ち切る決心をしたのでした。短歌に生き、恋に生きた短くも濃い日々の思い出を胸の奥にしまい込み、小浜へ戻った登美子は、明治34（1901）年、親の勧めどおりに本家の息子と結婚しました。

しかし、この結婚生活は、長く続きませんでした。夫は以前に患ったことのある肺結核を再発し、結婚後わずか2年で亡くなり、登美子は若くして未亡人となりました。

episode 2

心機一転、日本女子大学英文科予備科に入学

明治36（1903）年、実家に戻った登美子は、短歌10首を『明星』に発表。短歌によって夫を亡くした悲しみから救われ、『明星』の歌壇を再び飾るようになります。そして翌年には、日本女子大学英文科予備科に入学しました。

登美子は、遅い出発ながら、今後は教師として身を立てようと決心し、貞蔵もこれを許した。かれは、自分が強制した形で結婚させ、二十四歳で早くも未亡人にしてしまった登美子の将来を、人一倍案じていたのである。

《津村節子著『白百合の崖ー山川登美子・歌と恋ー』より》

その後、明治38（1905）年には、『恋衣』という詩歌集が増田雅子と与謝野晶子との女流歌人3人の共著として刊行されました。登美子は「白百合」という名で131首を掲載しています。「白百合」は鉄幹が登美子を「白百合の君」と呼んでいたことから付けられた名でした。

髪ながき少女とうまれしろ百合に額は伏せつつ君をこそ思へ

《『恋衣』に収められた白百合131首のうちの一首》

『恋衣』は若い女性たちの心をつかみ大人気となります。しかし、登美子は夫と同じ結核を発病し、小浜に戻って療養しますが、明治42（1909）年、29歳の若さで帰らぬ人となりました。

※明星…詩歌を中心とする文芸誌。明治33（1900）年4月から41（1908）年まで刊行。

check for 山川 登美子

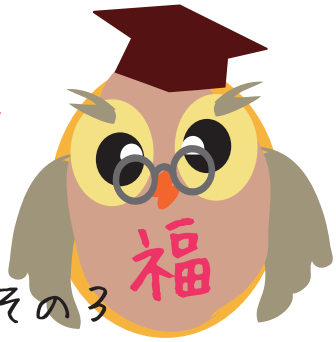
津村節子『白百合の崖ー山川登美子・歌と恋ー』新潮社
山川登美子倶楽部しろゆりの会編『山川登美子の世界』青磁社
『20世紀ふくい群像』上　福井新聞社
田辺聖子『千すじの黒髪』文藝春秋
『山川登美子と『明星』の人々』福井県立若狭図書学習センター
『山川登美子記念館』（パンフレット）山川登美子記念館
逸見久美『恋衣全釈』風間書房
『歌人山川登美子』福井県立図書館
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第Ⅰ集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ5　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

登美子が梅花女学校を卒業し、小浜の実家に戻っていた18歳頃、登美子が将来なりたかったのは女流作家ではなく、画家でした。しかし、厳格な父が許すはずはなく、そんな息苦しさから抜け出すように、登美子は再び大阪に出て女学校の研究生になったのでした。

いっしょに考えよう

福ろう博士の先人の力ってなんだろう講座 その3



「さて、ここまでいろいろな先人の話を読んで、諸君はもう気づいたじゃろうか。彼らの全てが幼い頃から特別な才能を持っていたわけではないことを。たとえば勉強や学問で言えば、それが好きだった人も、嫌いだった人もおった。後に政治家になった由利公正も後者の一人じゃった。

しかし、この本に登場している人々の全員が、自分のやろうとしたことに努力を惜しまなかったのは間違いない。不思議なもので、自分がやりたいことなら、どんな努力も苦にならないものじゃ。諸君もそうじゃろう。

そこでじゃ、諸君に一番身近なところで、勉強に関係する話も一つ紹介しておこう。今から1世紀ほど前に、生徒目線を重視した学習について提唱した木下竹次という教育者がいた。当時としては革新的なものじゃった。

その考えの原点というのが自発的な学習。つまり、教師が知識を生徒の頭に押し込むのではなく、人間なら誰もが持っている自ら知りたいと思う学習力を彼は重視したのじゃ。自発的な興味を持てば努力が苦にならない。それは新しいスポーツやゲームを始める時、やり方を覚え、攻略法を学び、経験値を上げて、スポーツならトーナメントを勝ち進み、ゲームなら次のステージへと進んでゆくのとよく似ておる。いろいろな先人が自分のいきたい道を進むために、努力を惜しまなかったという事実も、それを証明しておるようじゃな。」

～意識を変えてくれる［先人の力］～

身につく学習の話

「学習の本質というものは、成績や受験といった目前のことに気をとられて忘れがちじゃが、本来、学習には知る喜びや考える楽しみが詰まっておる。もし勉強がつまらないと思い込んでいるなら、木下竹次が見つめた学習の本質を思い出してほしいのう。意識のチャンネルをちょっと本質に戻せば、思いもよらない面白いステージが待っていることを知るじゃろう。」

合科学習を提唱した木下竹次（きのしたたけじ）【大正時代】

100年前に生活科を先取りしていた教育学者

木下竹次は明治5（1872）年、福井県勝山市に生まれ、東京高等師範学校（筑波大学）を卒業して教師となり、学校教育の現場で過ごしながら、教育の本質を研究し続けました。

竹次はこう述べています。「学習の目的というと知識・技能の習得と考えられやすいが、学習すればもちろん知識・技能は習得できる。たしかに、知識・技能は習得しなければならないが、知識・技能の習得は学習の最終目的ではない。学習の目的は、経験的自己を向上させることであり、生の要求をまっとうするために、創造の力を創造的に使用する作用を習得することである」。そして、子どもたちが目を輝かせて取り組む学習力を尊重し、教師主導の他律的学習から児童・生徒が主体の自律的学習の方法を研究。子どもたちが自力で探究し、みんなで学び合うことが重要であると考えました。

この考えに基づいて竹次は「学習すなわち生活、生活すなわち学習」と捉え、現在の生活科の導入に先駆けること100年ほど前に、「合科学習」の授業を提唱。雑誌『学習研究』を創刊して全国的な合科学習運動を展開し、小学校教育に影響を与えました。当時、奈良女子高等師範学校に勤めていた竹次のもとには、その実践方法を学ぼうと全国からやってくる教師たちがあとを絶たなかったといいます。

ちょっとコーヒーブレイクじゃ

並んでいる写真は
この本に登場しておる
先人ゆかりのものじゃ。
誰にゆかりのものか
わかるかな？

福井県の先人ゆかりの写真あてクイズ

正解は P237

ヒント 織田信長に仕えた戦国武将を祀る神社

ヒント 福井県で誕生したコシヒカリ

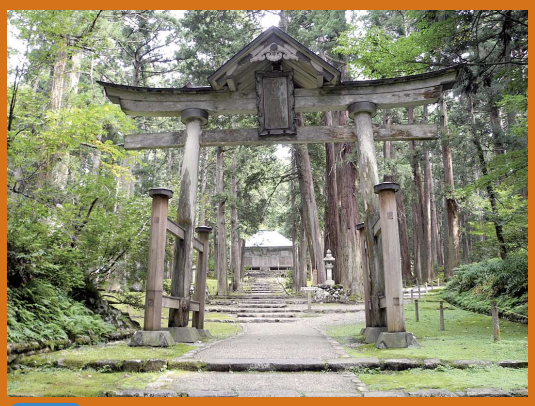
ヒント 戦国時代のまち、一乗谷朝倉氏遺跡

県立若狭歴史博物館所蔵

ヒント 人体図解書を翻訳した『解体新書』

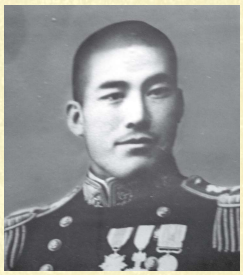
ヒント 日本六古窯の一つ、越前焼を紹介

ヒント 水月湖と久々子湖をつなぐ運河、浦見川



ヒント 白山信仰の修行の聖地、平泉寺白山神社

佐久間勉（さくまつとむ）



1879年～1910年

海軍軍人、潜水艇の艇長。潜水艇が沈没し、部下13人とともに職務を遂行して殉職（※じゅんしょく）。手帳に記した遺書は世界に感銘を与えた。

どんな子だった？

自分の心と体を鍛えることを惜しまない努力家タイプ

勉は、三方郡八村（やむら）（若狭町）にある前川神社の神官の次男に生まれました。幼い頃は内気な性格でしたが、成長するに従って、自分を鍛え、強い精神力と身体を養っていきました。

近くの小学校を卒業した後は、12キロも離れた三潟尋常高等小学校（みかたじんじょう）（美浜町弥美小学校）の高等科に入学。毎日、長い道のりを歩いて通学した上に、夜は外で木刀を振って体を鍛えました。そして、15歳になると、福井県尋常中学校小浜分校（後に小浜中学校、現・県立若狭高校）へ入学します。勉の家は、楽に中学に進ませてやれるほどの経済的な余裕がなく、勉は随分と迷った末に、父の前に正座して両手をついて頼んだといいます。

episode 1

勉が艇長を務める第六潜水艇の沈没

中学から海軍兵学校へと進みたくましく成長した勉は、軍人としての人生を歩み出します。明治42（1909）年12月には、国産初の第六潜水艇の艇長に就任。しかし、その潜水艇は、アメリカに注文して造ったものより性能が劣るため、ドンガメというあだ名がつけられていました。そして、勉の運命は、その第六号潜水艇とともに悲しい結末へと向かっていきます。

明治43（1910）年4月15日、第六潜水艇は、山口県新湊沖で、半潜航の訓練を始めました。半潜航とは、空気を取り入れる通風筒を水面に出して進むため、水が浸入する危険性の高い航法です。午前9時50分頃、訓練が始まって間もなく通風筒から海水が浸入。勉は通風筒のバルブ弁を閉じるよう指示しますが、弁を動かす鉄のチェーンが外れ、手でバルブを閉め終る頃には、大量の海水が、潜水艇を後部から海底へと沈めていきました。

浸水で電気系統が壊れた中で、勉は艇を浮上させるために手を尽くしますが、艇内にガソリンのガスが充満。さらに異常な高気圧状態となり、最悪の事態が訪れます。次第に酸素が減り息苦しくなる中、勉は小さな覗き窓から入る海中のわずかな光をたよりに、手帳に遺書を書き綴りました。

■佐久間勉の遺書［抜粋］（ルビを付記）

我レ等ハ国家ノ為メ職ニ斃（たお）レシト雖（いえど）モ　唯々遺憾（ただただいかん）トスル所

（県内）若狭町　小浜市
（県外）広島県　山口県　鹿児島県

写真提供：若狭町教育委員会所蔵

八　天下ノ士ハ之ヲ誤リ　以テ将来潜水艇ノ発展ニ　打撃ヲ与フルニ至ラザルヤヲ憂フルニアリ
希クハ諸君益々勉励以テ　此ノ誤解ナク将来潜水艇ノ発展研究ニ　全力ヲ尽クサレン事ヲ　サスレバ我レ等　一モ遺憾トスル所ナシ

公遺言
謹ンデ陛下ニ白ス　我部下ノ遺族ヲシテ窮スルモノ無カラシメ給ハラン事ヲ　我念頭ニ懸ルモノ之レアルノミ

沈んでいく潜水艦の中で、部下の遺族のことを真剣に心配する勉の人間性が、この内容から伝わってきます。

episode 2

世界に感銘を与えた勉の遺書

沈没の2日後、潜水艇が引き揚げられ、勉の遺書が発見され、その内容が発表されると、外国の新聞にも載り、大きな反響が起こりました。こうした事故は欧米にも何度かあり、引き揚げ後に潜水艇のハッチを開けると、そこに乗組員たちが殺到して亡くなっているという状況でした。ところが第六潜水艇では、乗組員全員が最期まで修繕しようとそれぞれの持ち場を離れずに殉職したのです。こうした乗組員の姿や勉の遺書は、感銘を与え、各国から多くの弔電や見舞金が寄せられました。

また、勉の遺書は、イギリス海軍士官学校の教科書に軍人の模範として紹介され、アメリカでは国会議事堂の大広間に、原文の写真コピーと英訳文が、ワシントンの独立宣言がある展示棚の一角に陳列されました。

一方、国内では小学校の※修身の教科書に「沈勇」と題して掲載され、日本中の子どもたちが、責任を果たす大切さを学びました。その後半部分では次のように述べられています。

遺書には、第一に艇を沈め部下を死なせた罪を謝し、乗員一同死ぬまでよく職務を守つたことを述べ、又この異変のために潜水艇の発達の勢を挫くやうな事があつてはならぬと、特に沈没の原因や沈んでからの様子をくはしく記してあります。

次に部下の遺族が困らぬやうにして下さいと願ひ、上官・先輩・恩師の名を書連ねて告別の意を表し、最後に十二時四十分と書いてあります。

艇の引揚げられた時には、艇長以下十四人の乗員が最後まで各受持の仕事につとめた様子がまだありありと見えてゐました。

《文部省『尋常小學修身書　巻六』（大正11年発行の教科書の複製版）より要約》

夏目漱石は、この事故をもとに、絶望状態の中での本能的な行動と責任感による行動について『文芸とヒロイック』という評論文を書き、また、与謝野晶子は追悼の歌を詠みました。そして、今も毎年、勉の命日4月15日に、若狭町と小浜市で慰霊祭が大々的に行われています。

※殉職…責を果たそうとして命を失うこと。
※修身…第二次世界大戦が終わるまで、国民の道徳教育のために設けられていた教科の一つ。

check for 佐久間 勉

『郷土の偉人　佐久間勉』佐久間勉艇長遺徳憲彰会
『沈勇の人　佐久間勉』三方町立図書館
占部賢志『子供に読み聞かせたい日本人の物語』致知出版社
青園謙三郎『潜水艦の草分け佐久間勉』福井豆本の会
『三方町史』三方町
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第２集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ５　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

勉は家族や恩師、友人をとても大切にしており、学生時代から、それらの人々によく手紙を書き、お礼や近況の報告をしています。そうした勉の人柄を伝える手紙や、中学校時代に勉が筆写した教科書、そして、遺書のコピーや遺品などを、若狭町にある佐久間記念交流会館（若狭町北前川61-2）で見ることができます。

大森房吉（おおもり ふさきち）

1868年～1923年

東京帝国大学で地震学の研究に没頭。大森公式の発見や地震計の発明、震災対策など、近代地震学の夜明けを作り地震学の父と呼ばれる。

どんな子だった？

福井藩の下級役人の子に生まれ、一家の期待を背負って学問を志す

房吉は、五男三女の末っ子として、福井藩の百軒長屋で生まれました。父親は勘定方の下役人で、収入が少ない上に8人の子どもがいる生活は、大変苦しいものでした。

明治7（1874）年、房吉は旭小学校に入学。4年生の時に、一家で東京へ移り住み、その後は東京の小学校に通います。

家が貧しくても優秀な房吉に、教師は進学を勧め、房吉は一家の期待を背負って、秀才の集まる共立学校（開成高校）に入学。成績は常にトップをとり続けました。2年後、東京帝国大学に合格し、大学院では地震学と気象学を専攻。大学の助手をして給金をもらいながら、研究に没頭していきます。

episode 1

数々の研究・発見・発明に世界が注目

明治24（1891）年に岐阜県で発生した「濃尾（のうび）地震」は、死者7200人を超える大災害となり、この地震をきっかけに、翌年、国立の震災予防調査会が発足しました。房吉は研究員の一員となり、数年後に上司が死去したため、房吉が実質上の責任者となって、以降30年間、生涯をかけて震災の防災と地震研究に力を注ぎます。房吉は徹底した実地調査をもとに、研究論文を次々に書き、日本における地震学の確立に大きく貢献しました。

その中で、大森式地震計の発明は、地震観測に革命をもたらします。1899年のアラスカ地震において、P波、S波、L波の違いを区別して記録し、世界の地震学者を驚かせました。

また、その地震計によって震源地を特定するための公式を発見。それは現在も「大森公式」と呼ばれ、3地点の初期微動（びどう）継続時間から簡単に震央を決定する方法の原点となっています。さらに地震帯の発見は、現在の地震研究につながる画期的なものでした。房吉が明治40（1907）年に著した『地震学講話』の終章には、アメリカ西岸と日本の地震帯の関係や、日本の東海、南海における地震の発生予測について述べられています。

欧亜と米大陸の二大地震帯相互の関係について面白い事実は、ほとんど同時に二ケ所に発する大地震です。（中略）智利国地震の震源は共に太平洋岸の甚だ深くの個所にありし

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

のみならず、互いに無関係のものではなくして78年前より大地震を続発する米大陸西岸の地震帯の南端と北端とに連動を拡張して同時に発起する地震なのです。（中略）

安政年間の我邦（国）の大地震は東南の海底より発するものですが、当時は本州東北部の海中よりは大震を生じなかったのです。然るに明治27年の根室釧路地震以降は東北海中より度々激震を発しましたので、すなわち東海道・南海道の海底は静謐となり、その代わりに東北海底の地震活動は盛んとなったものであります。従って本邦（我が国）最大の発起地たる東海道・南海道の海底は次期すなわち数十年を経たる後に地震活動力が再び盛んなる時に至りて大震を頻繁に発するかもしれませんが、目下の地震時期にはむしろ平穏なる状態を保持するかと想像されます。

《大森房吉著『地震学講話』第22章より要約》

episode 2

関東大地震の予知と発生

大正4（1915）年に東京で有感地震が頻発し、記者が東京帝国大学に押しかけたことがありました。房吉が京都にいたため、その対応には今村明恒（いまむらあきつね）助教授があたりました。彼は、百に一つの可能性があるため、火災に用心するべきと語ります。すると新聞や雑誌は、すぐにも大地震が起こるような見出しの記事を出し、東京はパニックに陥ります。房吉は急いで東京へ戻り、報道機関を通じて今村説を否定し、すぐには起こらないと力説した上で、将来の地震に備えるよう警告しました。今村に対しては、慎重にすべきと強く注意します。房吉は大地震の可能性を全面的に否定していたわけではかったのです。その後も、地震の被害を低減する対策に関する論文を頻繁（ひんぱん）に発表し続けます。

そして、8年後の大正12（1923）年7月、房吉は汎（はん）太平洋学術会議に出席するためオーストラリアへ向かう船上で、科学者たちの問いに対し、次に大地震がくるのは東京付近と断定します。しかし、人心を不必要に動揺させないように、いよいよと確信するまでは公表しないとも付け加えます。

シドニー到着後の房吉は、脳腫瘍（のうしゅよう）を発症しながらも会議に出席し、講演なども行います。そして、9月1日、シドニーの天文台を訪問中、そこの地震計の針が異常な曲線を描くのを見ました。すぐさま房吉はそのデータから震源を導き出し、愕然（がくぜん）とします。それはまぎれもなく関東で大地震が発生していたことを示していたのです。マグニチュード7.9、190万人が被災し、10万5千人余りが亡くなった関東大震災の発生を、異国の地で目の当たりにしたのです。房吉は急いで帰国しますが、船内で倒れ、横浜港に到着後すぐに東大病院に入院。しかし、11月8日、ついに帰らぬ人となりました。56歳でした。

房吉は生前、世界各国から勲章や名誉学会員の推薦が寄せられ、1914年には、ノーベル賞審査委員会からも論文の提出を求められます。しかし、房吉は現地調査や研究を優先し、論文を出しませんでした。もし提出していたなら日本初の受賞者になったのではないかともいわれています。

check for 大森 房吉

『地震学の父大森房吉』旭社会教育会
上山明博『関東大震災を予知した二人の男　大森房吉と今村明恒』産経新聞出版
『20世紀ふくい群像』上　福井新聞社
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第4集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ5　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

現在、中学校で学習する震源地を特定する方法は、房吉が発見した「大森公式」が使われています。また、福井市手寄町に大森房吉像があり、その横には昭和40年代まで各地の気象台で使用されていた大森式の地震計のレリーフが置かれています。

林 歌子（はやし うたこ）

1864年～1946年

キリスト教の博愛精神を学び孤児の養育施設を設立。廃娼（※はいしょう）運動や禁酒運動、婦人解放運動に生涯を捧げる。

どんな子だった？

父の夢を託され、熱心に勉強した女学生

歌子は明治時代が始まる少し前、大野藩（大野市）の下級武士の家に生まれました。

幼くして母を亡くしますが、父はたいそう歌子を可愛がり、自身が抱いていた学問への夢を託し、料理や裁縫よりも孔子の書物を読むことを勧めたといいます。

明治10（1877）年、福井に女子師範（※しはん）学校ができると、父は倹（つま）しい生活の中で何とか学費を工面し、歌子を入学させます。寄宿舎生活を送りながら熱心に勉強した歌子は、明治天皇の北陸巡幸（※じゅんこう）の際、学校の視察に訪れた大隈重信（おおくましげのぶ）の前で、御前講義（ごぜんこうぎ）を行うほど優秀な生徒でした。

episode 1

孤児や弱い立場の女性を救いたい

16歳の時、女子師範学校を首席で卒業した歌子は、大野の有終小学校に教師として勤務しました。その後、結婚して子どもが生まれますが、歌子も夫も跡取りであったために、家の相続問題がこじれて離婚。さらに不幸なことに、子どもが生後50日ほどで亡くなってしまいます。悲しみに打ちひしがれながらも歌子は、それを振り払うかのように、独立して生きることを決意し、明治18（1885）年、東京へと向かいました。

上京後、歌子は立教女学院の教師に採用され、創立者のウィリアムズ牧師からキリスト教の洗礼を受けます。そして、人権を尊重する思想を学び、大きく目を開かされるのでした。

また、この頃、信仰を通じて小橋勝之助（こばしかつのすけ）と実之助（じつのすけ）という兄弟に出会ったことが、その後の人生を方向づけていきました。孤児院をつくりたいという小橋兄弟の思いに共感した歌子は、小橋兄弟とともに活動を始めます。

一八九二（明治二十五）年、歌子は五年間勤め、将来を嘱望された東京・立教女学校の教師の道を捨て、兵庫県の農村で、孤児施設「博愛社」の社母となることを決意する。報告のため、郷里大野に向かう。福井からは人力車で途中一泊し、七年ぶりの帰省だった。

博愛社は、小橋勝之助が全財産を投じ、二年前に赤穂郡瓜生（現相生市）に建設。キリスト教精神に基づき、農業を中心とし

ゆかりの地
（県内）大野市
（県外）東京都中央区
大阪府大阪市淀川区
兵庫県赤穂市

写真提供：博愛社所蔵

た実業教育を目指した。しかし結核を病んだ勝之助は、余命いくばくもないことを悟り、事業を託せるのは、同じ信仰の友の歌子しかいないと、手紙を出した。

古新聞の封筒に入った手紙を受け取った歌子は、一カ月近く悩んだ末「終生を事業に献じ、かれんな孤児の友になろう」と決心する。

《福井新聞社編『20世紀ふくい群像』上より》

歌子は「博愛社」にイギリスの孤児院の方式を取り入れたり、里親制度を創設したりするなど、児童福祉の先駆者といえる活動を行います。また、明治33（1900）年には、日本基督教婦人矯風会の大阪支部長に就任し、5年後、同会の代表として「万国矯風会大会」に参加するために渡米。歌子はそこで外国の女性の様子を知り、日本における女性差別を痛感します。そして、アメリカで講演や募金活動などを行い、日本の女性の社会進出の拠点づくりの資金を集めました。

帰国後はその資金をもとに、※遊郭から逃げてきた女性や夫の暴力を受けている女性を保護する「大阪婦人ホーム」を設立。その後も、虐げられた生活を強いられる女性たちの救済に、生涯をかけて取り組んでいきます。

episode 2

訴え続けた女性の政治参加と地位向上

歌子の果たした仕事のなかで最も大きなことは、※廃娼運動で力強いリーダーとなったことである。曽根崎遊廓の全焼を機に、再建反対運動をおこし、新聞社や進歩的な人々に訴えて世論を喚起した。（中略）。遊廓業者たちは、歌子を「関西の廃娼女将軍」と呼んで恐れた。

《ふくい女性の歴史編さん委員会編『ふくい女性の歴史』より》

しかし、遊郭の再建を阻止する運動は、遊郭の利権者が政治に関与していたため敗北に終わります。歌子はこのことから婦人参政権の必要性を強く感じ、その運動にも活動を広げます。

また、ロンドンの軍縮会議に日本の女性代表の一人として出席したり、中国に孤児救済施設を開くなど、国際的な場でも活動しながら、女性の政治参加と地位向上を訴え続けました。しかし、時代は戦争へと歩調を早め、歌子たちの運動は軍国主義のもとで弾圧に耐えなければなりませんでした。

そして、迎えた戦後、日本が連合国軍の占領下に置かれ民主化が進んだことによって活動は急展開します。思想や言論規制などを廃止する指令が連合軍から次々と出され、昭和21（1946）年1月には、公娼制度の廃止が実現。高齢となっていた歌子は、連合軍による女性解放への大きな一歩を病床で聞き、安堵したかのように、その2か月後、81歳の生涯を閉じました。そして、8ヶ月後には、歌子が待ち望んでいた女性の国政参加が実現したのでした。

※廃娼運動…女性の人権擁護の立場から、公娼制度を廃止しようとする社会運動。公娼とは公に認められた売春婦。
※師範学校…教師になる人を教える学校。
※巡幸…天皇が各地を見回って歩くこと。
※遊郭…遊女と呼ばれる女性を置く売春宿などが集まる場所。

check for 林 歌子

高見沢潤子『涙とともに蒔くものは　林歌子の生涯』主婦の友社
久布白落実『貴女は誰れ？　伝記・林歌子』大空社
佐々木恭子『シリーズ福祉に生きる　33　林歌子』大空社
ふくい女性の歴史編さん委員会編『ふくい女性の歴史』福井県
『20世紀ふくい群像』上　福井新聞社
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第3集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ5　ふくいの先人たち　近現代』
福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

当時の日本は、女性の地位がとても低く「子供の時は父親に従え、結婚したら夫に従え」というのが当たり前の世の中でした。また、政府公認の遊郭が日本中にあり、親や夫の借金のために多くの女性がそこに売られていました。歌子はキリスト教の博愛の精神をもとに、こうした古い日本の考え方を改めることに力を尽くしたのでした。

島田墨仙（しまだぼくせん）

1867年～1943年

日本画家。父と兄も日本画家。繊細で威厳の漂う画風を作り出し歴史人物画の第一人者となる。日本画で初の帝国芸術院賞を受賞。

どんな子だった？

橋本左内の生家の隣に住み、左内を尊敬した少年時代

墨仙は、福井藩士の島田雪谷（せっこく）の次男として、福井城下で生まれました。父は多くの門弟（もんてい）を抱える画家でもあり、島田家の隣に住んでいた橋本左内（はしもとさない）P30参照にも書画を教えていました。左内は墨仙が生まれる前に亡くなっていますが、父から左内の話をよく聞かされた墨仙は、左内に尊敬の念を抱くようになります。

9歳頃になると墨仙は、父から絵を学び始め、その後、旧制福井中学校（県立藤島高校）へ入学しますが、3年後に父が亡くなったため途中で退学。成績の良かった墨仙は、翌年から代用教員になり、その後、19歳の頃、幼い頃から勉強してきた日本画の画家になろうと志を立てます。

episode 1

あきらめきれない画家への思い

美術学校ができることを知った墨仙は上京し、その設立を進めていた岡倉天心（おかくらてんしん）P160参照を訪ねました。しかし、開校はもう少し先のことと知らされ、失意のうちに帰郷。その後の10年間は福井中学校の教員をしながら、独学で日本画の勉強をしました。この頃、墨仙は小林寿と大平広正という洋画家から西洋画の技法も習得しています。

小林は藩校「明新館」のアメリカ人教師グリフィスP36参照から図画を学び、大平は東京の彰技堂で西洋画を本格的に学んでいました。彼らは墨仙の父から学んだことに対する恩返しの意味で、当時最先端の西洋画の技術を墨仙に教授し、19歳頃には本人の納得いくレベルにまで導きました。この二人の師が与えた西洋画の表現、正確な物の見方、特に人体骨格などの写実の知識は、日本画の非写実表現に慣れ切っていた墨仙にとって新鮮で大いに触発を受けるものでした。

《福井県立美術館発行『美術館だより』127号より》

日本画を極めたい思いにかられた墨仙は、ついに明治29（1896）年に再び上京し、すでに東京で日本画家になっていた兄の雪湖（せっこ）のところに身を寄せます。そして、その人生に大きな影響を与える師に出会うことになります。

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都　福島県

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

「橋本雅邦先生の龍虎の屏風と釈迦十六羅漢の二図にはビックリした。今の世に斯やうな上品な調子の高い迫力のある絵を描く作家があらうとは夢にも知らなかったのだから全く驚いた」

「墨仙自叙伝（四）」『国画』島田墨仙述

《福井県立美術館編『島田墨仙』より》

雅邦の作品に感動した墨仙は、兄の友人の助言もあって雅邦に入門。そして、その年の日本絵画協会第1回展で3等を受賞、3年後には1等に輝き、またたく間に才能を開花させ、以降、文展や帝展を中心に次々と作品を発表していきます。

episode 2

橋本左内への尊敬の念を原点に磨かれた画風

雅邦のもとで修行し、影響を強く受けた墨仙でしたが、墨仙の作品づくりには、もうひとり、大きく作用していた人物がいました。そのことについて、福井県立美術館の機関誌『美術館だより』は、次のような考察を載せています。

父雪谷は福井藩の下級藩士でしたが、書画の才能に恵まれ、日々の役向きのほかに藩主松平春嶽P124参照公に書画の指南役として重用されました。絵心のある藩内の子弟も競ってその門に入り、幕末から明治初年にかけて一時は千を越す門弟を抱えたと伝えられています。そのなかには当時の福井の重要人物も含まれており、息子墨仙の成長に多大なる影響を及ぼします。

その筆頭に挙げられるのは幕末の志士・橋本左内です。島田家と橋本家は家が隣同士だったので、少年の左内はよく島田家に顔を出して8歳年上の雪谷から絵や書を習うのを楽しみにしていました。墨仙の生まれる8年前左内はすでに世を去っていましたが、島田家には左内の遺墨が数多く遺っていました。後に雪谷はそれらを見せながら「左内さんはお前の年にはこんなに立派な絵を描いて、その上この通り上手な賛※さんまでしているのに、お前は悪戯遊びばかりしていてどうするのだ」と豊少年（墨仙）を戒めたということです。いかに〝悪戯小僧で手がつけられなかった〟豊少年とはいえそのような高尚な作品を見せられては反省せざるを得ず、左内に対してひそかに敬慕の念を抱くのでした。後に墨仙は橋本左内や藤田東湖、吉田松陰、佐久間象山などの幕末の志士たちの肖像を好んで描いていますが、それは幼い頃から聞き親しんだ隣家の偉人から受けた深い感銘とその時代への探究心の表れともいえるでしょう。

《福井県立美術館発行『美術館だより』127号より》

晩年の墨仙は、病に臥せることが多くなりますが、描くことへの意欲は衰えず、テーマとなる人物の精神や思い、願望、感情までも深く見つめ、その魂を紙に写し取るかのように作品づくりに取り組みます。そして、高い精神性の漂う格調高い画風をその特徴として、名実ともに歴史人物画の大家と呼ばれるようになりました。

昭和17（1942）年、日本画で初の帝国芸術院賞を受賞した3ヶ月後、墨仙は75歳でその生涯を閉じました。

※文展・帝展…文展は文部省美術展覧会の略。帝展は帝国美術院展覧会の略。ともに後の日本美術展覧会（日展）。

※賛…画面の中に書き添えた、その絵に関する詩句。

check for 島田 墨仙

『島田墨仙』福井県立美術館
松平永芳『先賢に学ぶ』
『郷土の人脈』福井市立郷土歴史博物館
『明治百年記念展』福井県

こぼれ話

兄の雪湖も日本画家として名を成し、日本だけでなくアメリカでも活躍しています。スミソニアン博物館での挿し絵の仕事や、アメリカの海洋調査船での生物スケッチのほか、日本美術の展覧会や講演などを通じ、日本文化の紹介に貢献した人物でした。

市川新松（いちかわしんまつ）

1868年～1941年

独学で教師となった後、鉱物を収集。自宅に造った市川鉱物研究室でひたすら研究に没頭。世界的な水晶の研究者となる。

どんな子だった？

最終学歴は小学校。独学で道を究めた努力家

江戸から明治へと時代が変わる数ヶ月前、新松は足羽郡三尾野村（福井市三尾野町）に住む打方新兵衛（うちかたしんべえ）の次男として生まれました。子どもの頃は体が弱かったため、両親は、学問で身をたてさせたいと考えていたといいます。

小学校を卒業した新松は、16歳から母校の代用教員として勤め、独学で教員となるための勉強をしました。その後、師範学校の教師となり、ある日、美しい結晶標本を見たことをきっかけに、鉱物に興味を持ち始めます。そして水晶の研究に魅了され、たいへんな苦労をしながら自分がやりたいことを極めてゆき、ついに鉱物学の世界的な研究者となったのでした。

episode 1

水晶に魅せられ、ついに教員を辞めて研究者に

新松はたいへんな努力家でした。独学で小学校の教員資格を取得して代用教員から正式な教員となり、そればかりか教員を目指す人を教える師範※学校の教員資格まで取得しました。

その間の26歳の時に、今立郡中新庄村（越前市中新庄町）の市川家の婿養子となり、市川の姓を名乗ります。市川家の養父らは、新松が学問をすることを望み、家の仕事を命じることは一度もなかったといいます。後に鉱物学の研究者として新松が大成するベースには、そうした市川家の学問に対する理解も大きな助けとなっていたのでした。

師範学校の教員資格を取得した新松は、34歳の時、三重県師範学校に勤務。この頃から鉱物を収集し、次に移った山梨県師範学校時代に美しい水晶と出会い、その成り立ちに興味を抱いて水晶の研究を始めました。そして、39歳の時、研究に専念しようと決心。教員を辞めて中新庄村に戻り、本格的な研究に没頭し、自宅に研究室と書斎を兼ねた「市川鉱物研究室」を設けるなど、研究に惜しみない情熱を注ぎました。新松の自伝『奮闘五十四年』の序文には、そうした熱い思いが記されています。

> 本書は私の過去五十四年間に於ける自學自習の活動を略記したる歴史である。此の一期間は分陰を惜みて、研究に没頭し未だ一回も花鳥風月の遊びを試みたる事なく又一日も無為徒然として日を送つたこともない。時計の針の絶え間なき秒音を警報

ゆかりの地
（県内）福井市　越前市
（県外）三重県　山梨県

写真提供：市川啓氏所蔵

episode 2

学歴の壁に阻まれながらも、世界に認められた鉱物学者

新松は水晶の表面に、蝕像（しょくぞう）という自然にできた模様があることに着目しました。水晶の成り立ちを解明する上で、それが重要な構造であると考えたのです。その基本的な研究方法は、まず日本各地から集めた水晶や、外国の水晶を様々な濃度の薬品に長時間浸して、表面に現れる蝕像の変化を記録するという地道なものでした。そして、新松は研究成果を発表。ところが、東京帝国大学の鉱物学の教授と意見が食い違い、学歴がなかったためか、新松は日本の学会で孤立してしまいます。

しかし、それで落ち込んだりはしませんでした。独学で英語、ドイツ語、フランス語の勉強に取りかかり、それぞれ半年ほどでマスターして外国の学術雑誌などに論文を発表。すると新松の研究は、世界の学者から高い評価を得て、一躍、注目を集めます。何度も論文が海外の学術雑誌に掲載され、カナダで開催された万国地質学会にも招待されました。

新松は蝕像の型の違いや様々な特徴を発見し、また、水晶の原子配列などの結晶構造を解明していきます。そうした論文に入れる蝕像の図は、非常に複雑で細かい線が重要となるため、新松は印刷屋任せにはせず、自分で銅版を彫る技術まで習得。また、福井県内で初めて高価なタイプライターを購入し、海外の研究者と英文でやりとりしたり、英語の論文を作成したりしました。

私が鉱物の結晶を観察するのは、肉眼だけで見るのみではない。拡大鏡に、或は顕微鏡もつかって、その特性を調べる。何千何万という水晶を一つ一つ調べて、ある一つの原則を発見すると、これを図に書いて論文をつくる。論文ができてから初めて先輩の参考書や雑誌などを調べ、自分の図と比べてみる。こんな時、たいてい私の研究の方がすぐれていることが多い。私は書物を読んで調べるのではなく、結晶という自然の書物をしっかり観察して、わかったことを図に書き、論文にしていく。私はこんな心構えで研究している。

《市川新松著『奮闘五十四年』より要約》

大学などの研究機関に属さず地方の農村に住み、こつこつと自分の足で標本を集め、不思議に思うことを徹底的に究明した新松。昭和16（1941）年に73歳で亡くなる直前まで、新松は研究と論文の執筆を続けていたといいます。

新松が最後まで使っていた研究室は、子孫によって建物ごと全てそのまま大切に保存されました。没後70年以上、当時のまま保存された「市川鉱物研究室」には、日本の鉱物学黎明期の研究資料が散逸せずに残り、そうした例は他に類を見ないことから、平成24（2012）年9月、新松が収集した7700点もの鉱物標本や、研究に関する直筆の資料、書籍、手紙などの約1万2000点が国の登録文化財に選ばれました。

※師範学校…教師になる人を教える学校。

として一分一秒の間も奮闘に奮闘を重ねて新智識の開拓に全力を注いだ。

《市川新松著『奮闘五十四年』序文より》

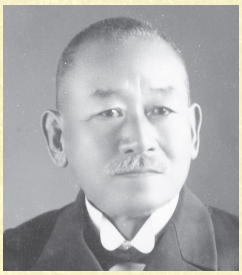
check for 市川 新松

市川新松『奮闘五十四年』帝国教育会出版部
『独学の水晶学者市川新松』越前市北新庄地区自治振興会
『市川鉱物研究室』市川新松先生・市川鉱物研究室顕彰会
福井新聞社編『福井人物風土記　ふくい百年の群像　続』昭和書院
『我等の郷土と人物』福井県文化誌刊行会
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第２集　青少年育成福井県民会議

こぼれ話

新松が10歳の時、おつかいのお金を落としたことがありました。その時、母から「言われた仕事は真心を込めてすること」「人から疑われるような行いをしてはいけない」ときつく言い聞かされ、この経験が人格形成に影響を与えたと自伝の中で語られています。

岡田啓介（おかだけいすけ）



1868年～1952年

福井県出身で唯一の総理大臣。
二・二六事件の標的とされたが助かる。
太平洋戦争の回避と終戦に力を注ぎ
日本の平和の礎をつくった軍人首相。

どんな子だった？

落第点を取っていたガキ大将が、一大奮起で猛勉強

啓介は郡（こおり）奉行を務める福井藩士の子として生まれました。7歳になると、新屋敷（福井市日之出3丁目）の家近くにできた藩の学校で書道を習い、ほどなく創立した旭小学校に入学します。しかし、花火を作ったり、学校へ行かずに魚を獲ったりしてばかりで、数学は落第点を取るほどの腕白少年でした。

ところが、中学では一転して猛然と勉強に励み、明新中学校（県立藤島高校）卒業後は叔父を頼って上京し、海軍のエリートコースを歩んでいきます。しかし、真面目で堅物という人物ではなく、周囲に好かれる柔和な人柄を発揮し、様々な難局を乗り越えていったのでした。

episode 1

平和を望み、戦争を回避しようとした海軍大臣

海軍兵学校と海軍大学校を卒業し、日露戦争、第一次世界大戦などで戦地に赴いた啓介は、その後、海軍の幹部への道を歩み始めます。昭和2（1927）年には、海軍大臣に就任。しかし、戦争に対して、啓介は他の軍人たちと異なる考えを持っていました。

それがよくわかるのが、昭和5（1930）年、ロンドン軍縮会議の開催にあたって、事前に啓介がとった行動でした。啓介は、軍縮を実現するために、海軍内の軍縮反対派を説得して回ったのです。その時の思いが、後に自身が回想して語った記録『岡田啓介回顧録』に示されています。

軍縮という問題についてわたしの考えはこうだった。だいたい軍備というものはきりのないもので、どんなに軍備をやったところでこれでいい、これでもう大丈夫だという、そんな軍備なんてありゃせん。（中略）

だから成るべく、ばかな、出来もせぬ争いをやめてしまって、争いを出来るだけ小さくしたほうがいい、と考えていたわけだ。米英を相手に戦争すべからずという、そんな「べからず」じゃない。戦うだけの支度が出来ればいいが、そんなことはいくらがんばっても国力の劣る日本には出来ない。（中略）

ロンドン会議のまとめ役として奔走するのに、わたしは出来るだけはげしい衝突を避けながら、ふんわりまとめてやろうと

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

考えたものだ。反対派に対しては、あるときは賛成しているかのように、なるほどとうなずきながら、まあうまくやってゆく。軍縮派に対して、強硬めいた意見をいったりする。

要するに、みんな常識人なんだから、その常識がわたしの足がかりなんだ。いくら激している人間にも常識的な一面はあるんだからね。そこを相手にする。狂人だったら別だ。ただ逃げる、これがわたしの兵法だ。

《岡田啓介著 岡田貞寛編『岡田啓介回顧録』波乱の軍縮会議より》

軍縮会議に向けての調停には、啓介の柔和な人柄をうかがわせる、彼独特の交渉術があったことがわかります。

episode 2

二・二六事件の襲撃で九死に一生を得る

昭和9（1934）年、啓介は内閣総理大臣に就任。その1年半ほど後の昭和11（1936）年2月26日、二・二六事件と呼ばれるクーデターが起こります。血気に逸る青年将校たちが率いる約1400名の兵士が、岡田啓介内閣総理大臣、高橋是清大蔵大臣、鈴木貫太郎侍従長らの殺害を企てて邸宅を襲撃。首相官邸では、啓介の秘書官をしていた義弟の松尾伝蔵が啓介の身代わりとなって殺害され、啓介は女中部屋に逃れました。

その時の様子が『宰相 岡田啓介の生涯』に、啓介の回想などをもとに描かれています。

松尾の遺体は、啓介の寝室に運ばれたが、この布団に寝かされた老人が誰か分からなかったらしい。総理大臣の顔を誰も知らなかったからである。しかし、年配といい、ひげをたくわえた風格といい岡田総理だろうと判断したのであろう。官邸にこのような老人が、ほかにいるはずがない。啓介の談話で続ける。

「自分は、この間に浴室を出て、壁に倚りかかって先方から見えないようにし、自分の寝室を覗いた。十数人のものが集まっている。一人が銃剣で、大広間にかかげてある自分の写真（夏の背広姿にて外務省の写したもの）をとりはずし、これを松尾と見較べ『これだ、これだ』と松尾を自分と思いこみ、みなどこかへ立ち去った」

《上坂紀夫著『宰相 岡田啓介の生涯』より》

その後、啓介は押し入れの中に隠れ、弔問客に紛れて脱出し、奇跡的に生き延びることができたのでした。

九死に一生を得た啓介は、その後、太平洋戦争の回避工作に力を注ぎますが、開戦を避けることはできませんでした。しかし、開戦後もあきらめずに、戦争終結のために、全精力を傾けます。終戦後、極東国際軍事裁判のジョセフ・キーナン主席検察官は、啓介を含む終戦工作に力を尽くした人物4人を「戦前の日本を代表する平和主義者」と呼び、功績を讃えました。そして、昭和27（1952）年、サンフランシスコ平和条約が結ばれ、GHQによる占領が終わった年、戦争の完全終結を見届けたかのように、啓介は、静かに85歳の生涯を閉じました。

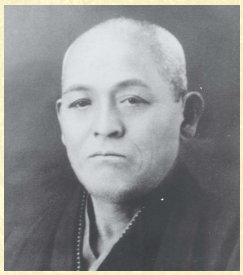
check for 岡田 啓介

岡田貞寛編『岡田啓介回顧録』毎日新聞社
上坂紀夫『宰相岡田啓介の生涯　2・26事件から終戦工作』東京新聞出版局
豊田穣『最後の重臣　岡田啓介　終戦和平に尽瘁した影の仕掛人の生涯』光人社
仙石進『巨木は揺れた　岡田啓介の生涯』近代文芸社
岡田貞寛『父と私の二・二六事件　昭和史最大のクーデターの真相』講談社
松本清張『昭和史発掘』(7) 文藝春秋
『20世紀ふくい群像』上　福井新聞社
『福井県史』通史編6 近現代二　福井県
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第3集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ5　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

兵学校時代、松平春嶽の東京の邸宅で開かれた祝いの席でのこと、啓介の父を知る春嶽は「大いに勉強せぬといかんぞ」と言いながらコップに酒を注いで啓介に勧めました。啓介が飲み干す度に春嶽が注ぎ、何杯も飲み干して泥酔したまま兵学校に戻った啓介は、謹慎と階級の下がる懲罰を受けてしまいました。

増永（ます ながこ）五左ヱ門（ざえもん）



1871年～1938年

庄屋の家柄に生まれ貧しい農家の副業をつくろうと私財を投じて眼鏡枠（めがねわく）の製造工場を創設。福井県の眼鏡産業の創始者となる。

どんな子だった？

村の人々を思う心優しい庄屋の跡取り息子

文珠山（もんじゅさん）のふもと、旧麻生津（あそうづ）村生野（しょうの）（福井市生野町）で代々庄屋を営む増永家に誕生した五左ヱ門。旧家の跡取り息子として子どもの頃は何不自由なく育ち、明治20（1887）年、17歳で家督を相続しました。

家を継いだ五左ヱ門は、庄屋として村の面倒を見る意識を持ち、村人の暮らしの問題に目を向けるようになります。生野は田畑が少ない上に、とくにこれといった産業もなく、村人の中には満足な生活ができない家も多かったのです。

明治31（1898）年、五左ヱ門は28歳で村会議員に選ばれ、村の暮らしを何とかする方法を真剣に考え始めます。

episode 1

農家の生活を助ける副業をつくりたい

明治30年代、五左ヱ門が村会議員になってほどなく、弟の幸八（こうはち）が大阪から戻り、織物工場の経営を五左ヱ門に勧めます。幸八は今で言えば起業家タイプの人物でした。五左ヱ門は、村の人々の収入に繋がると考え、工場を建て羽二重（※はぶたえ）を織る機屋（はたや）を始めました。ところが操業して間もなく、福井の町が大火に見舞われて機屋が相次いで倒産。そのあおりを受け五左ヱ門の事業は失敗に終わってしまいました。

それから数年後、幸八が今度は眼鏡づくりの話をもってきます。幸八は、大阪で眼鏡入れを製造していた生野出身の増永五作を通じ、眼鏡の卸商（おろししょう）に会い、眼鏡づくりに将来性を感じ取っていたのです。その頃、大阪では眼鏡づくりが盛んになり、需要も伸びていました。

幸八の話を聞き、五左ヱ門も眼鏡の将来性は理解できましたが、機屋の失敗もあり、すぐに承知することはありませんでした。しかし、五左ヱ門は眼鏡づくりが農家の副業に適していることなども、じっくりと考えた上で、ついに明治38（1905）年、村一番の大工の増永末吉を連れて大阪へ行き、自ら眼鏡枠づくりを習うのでした。

まだこの時代は、眼鏡製作などは、山師（※）的仕事と思はれていた。正しい商売とまで行かなかった時代だから、増永が工場を建てるから、やって来いといった処で、簡単に人が集るもので

（県内）福井市生野町

写真提供：増永眼鏡所蔵

はなかった。

それでも、五左ヱ門や、幸八、末吉等の説得で、増永第一期生ともいうべき連中が、生野の家へ集りはじめた頃、大阪から米田与八が、妻君と弟子一名を連れて乗込んで来た。

明治三十八年六月一日、（中略）この日に〝福井めがね〟が※呱呱の声を挙げたといえよう。

増永家は急に活気づいて、村内もこの噂で持切りである。

《大坪指方（元治）著『福井県眼鏡史』より》

五左ヱ門の工場に入った人々は早く技術を覚えようと、眼鏡枠職人の与八から必死に学び、本来なら3年かかるところを半年で習得してしまいます。五左ヱ門は次に東京から名工といわれる職人を招き、銀縁枠や赤銅枠の高度な技術を習わせました。そして、母の実家がある鯖江の河和田からも人を集め、生産力を上げます。ところが生産はできるようになっても肝心な販売は思うようにいかず、先祖伝来の土地も手放すほど経営は苦難の連続でした。

五左ヱ門自身も福井市内や近隣を回り、販売の陣頭に立ち奔走するものの、そう簡単には売れない。その上、大阪へ送った商品がいくつも「作り直し」の付せん付きで送り返されてくる。五左ヱ門にとっては羽二重での借金の上に、資材調達や人件費の経費は膨れ上がるばかりだったという。

《福井新聞社編『20世紀ふくい群像』上より》

episode 2

苦境を乗り越え、ついに日本一に輝いた製造技術

明治44（1911）年8月、「赤銅金ツギ眼鏡」が博覧会で金牌賞を受賞。五左ヱ門の工場の技術が日本一の栄光を手に入れたのです。その成功には、当初のメンバーそれぞれを親方とした製造グループが、責任を持って製品を仕上げる「帳場制」という独自のスタイルがありました。

また、五左ヱ門は人格教育を重視し、職人たちが将来独立する際のことも考え、工場の2階に夜間学校を開いて職人に教養を身につけさせました。そして、五左ヱ門の工場で腕を磨いた人々が次々と独立し、福井県の眼鏡産業の発展を担っていったのでした。

晩年になってからも五左ヱ門は、親方連中に酒の席で「同じ掛け軸でも、持つ人によって高価にも見えるし、安物にも見える。人柄とはそういうものだ。人を使う者は、その人の心が分からなければならない」とたびたび説いている。

《福井新聞社編『20世紀ふくい群像』上より》

こうして生野から始まった福井県の眼鏡づくりは、鯖江出身の職人が地元で独立したことや、昭和戦後期に旧鯖江三十六連隊の跡地が眼鏡工場に転用され、周囲に部品製造の会社ができたことで、鯖江市を中心として工場が増えていきます。そして、それぞれの会社がデザイン力や技術力を磨いて業績を伸ばし、福井県は眼鏡産業の一大産地となっていきました。

※羽二重…糸に撚りをかけない生糸を用い、平織りにした絹織物。柔らかく上品な光沢が特徴。
※山師…（ここでは）投機的な事業で大もうけをねらう人のこと。
※呱呱の声…産声。誕生。

check for 増永 五左ヱ門

大坪指方・大坪元昭著『越前めがね　ー増永二代の歩みー』増永精孝
福井新聞社編『めがねと福井　ー産地 100 年のあゆみー』福井県眼鏡協会
大坪指方（元治）『福井県眼鏡史』村井勇松
鯖江市産業部めがね課編『さばえめがねものがたり』
三輪信一『鯖江今昔』鯖江今昔刊行会
『20 世紀ふくい群像』上　福井新聞社

こぼれ話

五左ヱ門は、従業員のやる気を引き出すことを大切にした経営者でした。「帳場制」は五左ヱ門の工場独自の方式で、帳場（グループ）ごとに出来高で手間賃が支払われるため、皆が責任を持って品質向上に努めたのです。また、工場内で品評会も開催し、各帳場が模様や形などの工夫を競う気風を育てました。

藤野厳九郎

1874年～1945年

中国近代文学の父とされる魯迅に医学校で解剖学を指導。魯迅の小説『藤野先生』は中国の教科書に掲載され、日中友好の象徴に。

どんな子だった？

父譲りの生真面目さで、学問にも武道にも真剣

厳九郎は、敦賀県坂井郡下番村（あわら市下番）で代々医者を営む家に生まれました。父は緒方洪庵の適塾で蘭方医学を学び、帰郷後、福井藩からの招きを断り、地元のために村で医療を続けた生真面目で一徹な人物でした。

厳九郎は小学校に入る前から、そうした父に漢学を学び、小学校は5キロほども離れた丸岡の平章小学校に通いながら、隣村の私塾でも、漢文や習字、そろばんなどを習っていました。

その後、福井尋常中学校（県立藤島高校）に進学し、2年の時に愛知県立医学校（名古屋大学医学部）に入学。医学校では成績抜群で、剣道も強く、文武両道に秀でた学生でした。

episode 1

中国人留学生の魯迅と厳九郎の出会い

愛知県立医学校を卒業した厳九郎は、同校の解剖学教室の助教授や生命保険会社の社医、東京帝国大学（東京大学）の解剖学研究室を経て、仙台医学専門学校（東北大学医学部）に移りました。

厳九郎が教授になった明治37（1904）年、中国人留学生の魯迅（この頃は本名の周樹人）が入学しました。当時の日本の社会は、日清戦争や日露戦争の影響から、中国を後進国と見なす風潮がありましたが、厳九郎はそうした偏見を持たず、親切に魯迅を指導します。後に魯迅は、この時の厳九郎との交流を『藤野先生』という短編小説に著しました。

解剖学は教授ふたりの分担だった。最初は骨学である。はいって来たのは色の黒い、痩せた先生で、八字ひげをはやし、眼鏡をかけ、大小さまざまな書物を山のようにかかえていた。卓上に書物をおくなり、ゆっくりした、節をつけた口調で学生にこう自己紹介した――

《私は藤野厳九郎というもので……》

うしろのほうで数人が笑い声を立てた。（中略）

一週間たって、たしか土曜日のこと、かれは助手に命じて私をよばせた。研究室へ行ってみると、かれは人骨とたくさんの切りはなされた頭蓋骨――当時かれは頭蓋骨の研究中で、のちに本校の雑誌に論文がのった――に囲まれていた。

ゆかりの地
（県内）あわら市　坂井市
（県外）宮城県仙台市　中国浙江省紹興市

写真提供：あわら市教育委員会所蔵

episode 2

小説『藤野先生』に厳九郎への敬意を込めて

2年生の終わり頃、魯迅は、中国人の処刑とそれを見つめる中国人が写ったスライドを見て、その無表情さにショックを受けます。そして、医学で肉体を救うより、まず彼らの精神を変えなければと思うようになり、そのためには文学が最善という結論に達します。魯迅は退学し、仙台を去る決意を告げるため、厳九郎を訪ねました。その時の様子と厳九郎への思いをこう書いています。

かれは顔をくもらせ、何か言いたげだったが、何も言わなかった。（中略）

出発の数日前、かれは私を家に呼んで写真を一枚くれた。裏に「惜別」と二字書いてあった。そして私の写真もと乞われたが、あいにく手もちがなかった。あとで写したら送ってくれ、それから折りにふれ手紙で近況を知らせてくれ、とかれは何度も言った。（中略）

わが師と仰ぐ人のなかで、かれはもっとも私を感激させ、もっとも私を励ましてくれたひとりだ。私はよく考える。かれが私に熱烈な期待をかけ、辛抱づよく教えてくれたこと、それは小さくいえば中国のためである。中国に新しい医学の生まれることを期待したのだ。大きくいえば学術のためである。新しい医学が中国に伝わることを期待したのだ。私の眼から見て、また私の心において、かれは偉大な人格である。その姓名を知る人がよし少いにせよ。

《魯迅著　竹内好翻訳『魯迅文集』第二巻「藤野先生」より》

仙台を去った魯迅は、しばらくして中国へ帰国し、作家、思想家として多くの著書を世に出し、中国近代文学の父と言われるまでになります。魯迅は『藤野先生』の中で「彼の姓名を知る人がよし少ないにせよ」と書きましたが、この小説は後に中国の教科書に掲載され、藤野という名は中国人のほとんどが知るところとなりました。また、日本でも一部の教科書に掲載され、戦後は日中友好の象徴的な人物としても有名になりました。

そして今も『藤野先生』は、厳九郎の人柄や国境を越え互いを敬う心が、感動を与えてくれます。

※敦賀県…明治初期はめまぐるしく県域が変更され、明治6～9年の間は、現在の福井県とほぼ同じ県域の敦賀県が置かれた。

《私の講義、ノートが取れますか？》とかれは訊ねた。

《どうにか》

《見せてごらん》

私は筆記したノートをさし出した。かれは受けとって、一両日して返してくれた。そして、今後は毎週もってきて見せるようにと言った。持ち帰って開いてみて、私はびっくりした。同時にある種の困惑と感激に襲われた。私のノートは、はじめから終わりまで全部朱筆で添削してあり、たくさんの抜けたところを書き加えただけでなく、文法の誤りまでことごとく訂正してあった。このことがかれの担任の骨学、血管学、神経学の授業全部にわたってつづけられた。

《魯迅著　竹内好翻訳『魯迅文集』第二巻「藤野先生」より》

check for 藤野 厳九郎

魯迅『魯迅文集』第二巻（竹内好訳）筑摩書房
魯迅『阿Q正伝・藤野先生』（駒田信二訳・稲畑耕一郎解説）講談社
土田誠『医師藤野厳九郎』あわら市日中友好協会
泉彪之助『魯迅と藤野厳九郎』芦原町教育委員会
坪田忠兵衛『郷土の藤野厳九郎先生』藤野厳九郎先生顕彰会
太宰治『惜別』新潮社
藤野先生と魯迅刊行委員会編『藤野先生と魯迅』東北大学出版会
『20世紀ふくい群像』下　福井新聞社
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第Ⅰ集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ5　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

あわら市には、藤野厳九郎と魯迅の資料を展示する藤野厳九郎記念館があります。これは三国町宿にあった厳九郎の旧居を移築したもので、昭和58（1983）年に魯迅の故郷である中国の浙江省紹興市とあわら市（当時は芦原町）の友好都市締結を記念して寄贈されたものです。

禿（とく）すみ

1876年～1950年

寺の娘に生まれ父の了教（りょうきょう）とともに日本道徳会や女子のための学校を創設。生涯を女子教育の発展に捧げる。

どんな子だった？

母から経典を習い、知識欲が旺盛な少女へ成長

すみは新横江村五郎丸（しんよこえむらごろうまる）（鯖江市五郎丸町）にある浄覚寺（じょうかくじ）住職の了教（りょうきょう）の長女として生まれました。幼い頃から母に経典を習い、5歳で小学校に入学。すみは勉強がよくでき、9歳の時には県から表彰を受けたほどでした。

小学校を卒業すると、父と二人揃って上京。父はヨーロッパへ行く準備のために英学塾に入学し、すみは成立学舎女子部に入学。卒業後は鯖江に帰郷しますが、とにかく知識欲の旺盛なすみは、鯖江の本山誠照寺（じょうしょうじ）の波多野（はたの）学師（まなぶ）について宗教学を学びます。そして、数え年18歳になると今度は、再び鯖江を出て、京都の同志社女子部（同志社女子大学）に入学しました。

episode 1

男子と同じように学問がしたい！

すみが子どもの頃は女性の社会的地位がとても低く、〝学問は男子がするもの、女子に学問は必要ない〟という考え方が一般的でした。そうした時代に、すみのように地方から東京や京都の学校に入学するのは、極めてまれなことでした。理想を思い描き、それに向かって行動する強い意思の力をすみは持っていたのです。

そうした性格をうかがわせるこんなエピソードがあります。12歳の時のことでした。外国へ行く父がまず語学を学ぶため上京することを知ったすみは、自分も父と一緒に東京に出て勉強したいと考えました。そして、家族の留守中に、こっそり髪を切るという行動に出ます。髪を短くすることで男子になろうとしたのです。

このことを知ったのは、まず母親であった。（中略）すみは布団をすっぽりかぶっていた。机の上には、うず高く髪の毛の山があった。驚いて布団をめくって見ると、そこに髪を切ったすみの姿があった。

「男ならばともかく」という両親の言葉に、自ら髪を切ってその熱意を示したものであった。

父親の了教もやがて帰宅し、このことを知って大いに驚いたが、娘の学問に対する強い決意を知り、遂に東京へ同行することを許した。この年の暮れ、父と娘は上京した。

ゆかりの地
（県内）鯖江市五郎丸町
福井市毛矢町・宝永
（県外）東京都千代田区　京都府京都市

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

《仁愛女子高等学校百年史編纂委員会編『仁愛女子高等学校百年史』より》

ところがその髪型には、こんな後日談も…。上京した翌年、すみは東京の成立学舎女子部に入学しますが、手続きのために学校の事務室を訪れると、男子と間違われ、入学を断られそうになります。勉強がしたいという願いは男子の髪型にしたことで叶いましたが、思いがけない誤解を招いてしまったのでした。

episode 2

福井県に女子教育の学校を設立

22歳の時、父の了教が日本道徳会を設立し、すみはそれを手伝います。父は外国の視察を通して、欧米では宗教が道徳の基準としても尊重されていることに驚き、日本の宗教教育の新しいあり方を考えたのでした。

帰国した父から聞くいろいろな話は、すみの心を大きく揺り動かしました。父の話によると、外国の豊かな生活の基本は家庭であり、その中心となるものは母親である、つまり、優れた母親のもとに、よい子ども、よい家庭が作られる、ということを強く教えられたわけです。すみは、優れた母親になるために、「女子の教育が必要」であり、それには学校が必要であることを痛感し、将来の自分の目標を「女子教育の実践」と決めていきました。

《鯖江ロータリークラブ発行『丹南地域の先人に学ぶ』より》

日本道徳会は設立後ほどなく婦人部を設け、翌年には福井市毛矢町に婦人仁愛会教園を設立して、女子教育に取り組み始めます。明治34（1901）年には、私立学校の認可を受けて「仁愛女学館」と改称し、すみが学校の運営を任されます。

すみはここで、修就（道徳）と読書（国語）を教え、希望者には英語も教えていました。そのほかすみは学園にまつわるすべてのことを担当しなければならなかったので、当時二二才のすみにはたいへんな負担になったものと考えられます。

しかし、了教とすみが行った「宗教的情操豊かな婦人の育成にこそ社会の発展と福祉の基礎がある」という理念が受け入れられ、また、すみの人柄を慕って各地から入学する者が数を増してきました。

《鯖江市教育委員会編『郷土を築いた人々』より》

大正13年（1924）には、それまでの仁愛女学校を福井仁愛高等女学校に昇格。すみは校長に就任し、女子教育に全力を注ぐことになりました。

創設から半世紀ほど経った頃、学校は2度の大きな災難に見舞われます。昭和20（1945）年には福井市内が空襲で焼け野原となり、ようやく再建された仮校舎は、その3年後の福井地震で倒壊。しかし、すみの人柄を慕う人々の善意によって学校が再建され、昭和25（1950）年、すみはその復興を見届けたかのように、女子教育に全てを捧げたその生涯を閉じました。

check for 禿 すみ

禿すみ『法の月影』福井仁愛学園
『仁愛女子高等学校百年史』仁愛女子高等学校
『郷土を築いた人々』鯖江市教育委員会
『丹南地域の先人に学ぶ』鯖江ロータリークラブ
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第２集　青少年育成福井県民会議
『ふくい女性の歴史』福井県
田中光子『新・ふくい女性史』勝木書店
『20世紀ふくい群像』上　福井新聞社
『これき人物シリーズ５　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

すみは本名を「眞子」といいますが、「すみ」あるいは「須弥」という名をペンネームのように使用していました。「須弥」は仏教の世界観の中で中心となる「須弥山」から名付けたもので、すみはこの名を好んで使いました。

橋本進吉（はしもとしんきち）

1882年～1945年

国語学者、東京帝国大学教授。古代の仮名遣（かなづか）いを解明。文節によって言葉の構成を整理し現代の文法のもととなる橋本文法を確立。

どんな子だった？

選んだのは、家業の医者ではなく言語学者への道

進吉は、代々医者を営む橋本家の長男として、明治の中頃、港町として賑わう敦賀の晴明（せいめい）（敦賀市相生（あいおい）町付近）で生まれました。5歳の時に父が亡くなり、やがて就将（しゅうしょう）小学校（敦賀市西小学校）に入学しますが、1年生の頃から英語を習ったといいますから、教育熱心な母だったようです。

その後、京都府中学校（京都府立第一中学校）、第三高等学校（京都大学）へ進み、東京帝国大学文科大学（東京大学文学部）に入学。医者の道には進まずに言語学を学び、卒業時には、優秀な学生に授与される恩賜（※おんし）の銀時計を贈られています。

episode 1

日本の国語研究を大きく発展させた進吉

大学院に進んだ進吉は、在学中から文部省の国語調査委員会に入ります。その後、東京帝国大学で助手として勤めるようになり、18年間、国語研究室で資料の収集や調査、研究に没頭。昭和2（1927）年に東京帝国大学助教授になり、2年後には教授に昇進。昭和20（1945）年にその生涯を閉じるまで、人生を日本の国語研究ひと筋に費やし、国語研究の第一人者として、多くの功績を残しました。

進吉の研究は、大きく分けて音韻史の研究と文法研究の2つが挙げられます。音韻史というのは聞き慣れない言葉ですが、意味を持つ言葉の発音を細かく分析し、その古代からの移り変わりを調べるというものです。進吉は多くの古い書物から、昔の日本語を検証していきました。中でも万葉集で使われた文字をもとに、奈良時代の言語を検証して「上代特殊仮名遣（じょうだいとくしゅかなづか）い」を発見し、それを体系づけました。

奈良時代の人々は、今よりも多くの発音を使い分け、また、同じ発音でも、それを書き表す時の仮名遣いは、その意味に合わせた別の文字を使っていたことがわかったのです。進吉は現代人が忘れてしまっていた日本語の豊かな世界を明らかにしました。

一方、文法研究は、実は現代の私たちにも身近なものです。進吉は、言葉や文章の構成の法則を研究し、たんねんに分類整理していきました。それは「橋本文法」と呼ばれ、今、学校教

ゆかりの地
（県内）敦賀市
（県外）東京都

写真提供：『橋本進吉博士を偲ぶ』
発行　橋本進吉博士顕彰碑建立事務局

育で教える文法のもととなっています。「橋本文法」は、「文節」という言葉の単位で一つの文節ごとの役割を主語や述語などに分け、日本語を理論的に解明することになったのでした。

episode 2

膨大な資料から古代の日本語をひも解く

進吉の研究を子ども向けにわかりやすく解説したものとして、『若越山脈』第6集に、言語学者の佐藤茂氏の執筆による「国語の研究ということ ー橋本進吉とわたしー」があります。佐藤氏はその中で進吉の研究について、次のように紹介しています。

〈音韻〉とか〈音韻史〉とかいうと、読者のみなさんにはちょっと分かりにくいかもしれない。くわしく述べると大変なので〈音声〉とおきかえて理解して下さっていい。（中略）

日本の上代のかなづかいの中に、二通りの使い方のあることに、はじめに気がついたのは本居宣長（もとおりのりなが）だった。宣長は『古事記（こじき）伝（でん）』のはじめのところで、そのことにふれている。

それをさらにくわしくしるしたのは、宣長の弟子の石塚龍麿だった。それが龍麿の『仮名遣奥山路』である。しかし、この本の真価は、ながく人に知られぬままに明治となってしまった。

明治も末近いころに、橋本進吉は、万葉集を調べて、龍麿の仕事とは別に、全く同じことに気づき、やがて龍麿の本を見ておどろき、そのことにつきしるしたのが『帝国文学』に発表したものだった。

簡単にいうと、今はキとかくとき、キとしかかかない。上代のかなは万葉仮名（漢字の仮名）であるが、キならキにあたる万葉仮名のかき方に、二通りあるというわけである。

その全体をいうと、キ・ギ・ケ・ゲ・コ・ゴ・ソ・ゾ・ト・ド・ノ・ヒ・ビ・ヘ・ベ・ミ・メ・モ・ヨ・ロ、そのほかア行のエとヤ行のエ、これらに二通りの書き方のあることが分かったのである。その二通りのかなのつかい方を区別するために、甲類・乙類とよんだ。（中略）

今のカキクケコは、上代のカ・キ甲・キ乙・ク・ケ甲・ケ乙・コ甲・コ乙というわけである。

キ甲類・キ乙類というのは、上代の仮名の資料をよく調べ、よく吟味（ぎんみ）して、今ならキというところが、キ甲類・キ乙類となっていることを明らかにしたわけである。

資料は、ただ眺（なが）めていたり、飾（かざ）っておくだけなら、置物のようなことになってしまう。その資料をよく吟味するところに、研究があり、解釈があり、発見がある。

《青少年育成福井県民会議編『若越山脈』第6集より抜粋》

こうした研究には、膨大な資料の分析が必要です。しかし、進吉はそれにかける労力を惜しまず、むしろワクワクしながら小さな発見を積み重ね、日本の国語学の基礎を築いたのでした。

その後、進吉が亡くなった翌年に、『橋本進吉博士著作集』の1冊目が発刊されますが、その全12冊を発刊し終わったのが、昭和58（1983）年。なんと足かけ38年を要したわけです。どれだけ膨大な資料研究であったかがうかがえます。

※恩賜…行いを讃えられ、天皇から物を賜ること。

check for 橋本 進吉

『橋本進吉博士を偲ぶ』橋本進吉博士顕彰碑建立事務局
『日本語学者列伝』明治書院
金田一春彦『橋本進吉伝』明治書院
橋本進吉『天草版ドチリイナキリシタン』岩波書店
橋本進吉『古代国語の音韻に就いて』岩波書店
橋本進吉『橋本進吉博士著作集』1～12　岩波書店
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第6集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ5　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

進吉は古典資料の保存にも貢献しています。新吉の研究には、古い書籍を見ることが必要でした。しかし、それらは国宝や重要文化財であることが多く、手にすることが困難でした。そこで新吉は複製事業にも力を注いだのでした。

秋山徳蔵（あきやま とくぞう）

1888年～1974年

宮内省大膳寮（※くないしょう※だいぜんりょう）の初代厨司長（ちゅうし）として天皇の食事や晩餐会などの料理人を務める。「天皇の料理番」。『仏蘭西（ふらんす）料理全書』を刊行。

どんな子だった？

憧れを持つと我慢できなくなる性格のガキ大将

徳蔵は、今立郡国高村村国（越前市村国）の大地主、高森家の次男として生まれました。

子どもの頃は、きかん坊でいたずらばかりして問題を起こすなど、近所で評判のいわゆるガキ大将でした。また、何かに憧れると我慢できないところがあり、10歳の時、禅寺の小坊主に憧れて村国山の興禅寺（こうぜんじ）に入りますが、供え物を食べるなど、悪さやいたずらは治まらず、1年で寺から追い出されました。13歳の時には、大阪の伯母（おば）から米相場で大成功した人の話を聞くと、家出して大阪へ行き、1ヵ月ぐらいで父親に連れ戻されたこともありました。

episode 1

生まれて初めて食べたカツレツの味に魅了されて

徳蔵の生涯をモデルにして描いた小説『天皇の料理番』（杉森久英著）は、少年時代のエピソードをこう語っています。

小さいときから、強情な子だった。

何かほしい物があると、手にいれるまであきらめない。あばれる。わめく。

しかっても、なだめても、代りに何かほかのものをやろうといっても、どうしても承知しない。望みのものがきまっていて、ほかのものでは駄目なのである。

この子供が、十のとき、坊主になりたいと言いだした。（中略）実は、本人は坊さんのスタイルのよさにあこがれたのであった。小学校の同級に、お寺の小僧をやっているのがいたが、ふだんの立ち居振舞いがきれいで、上品にみえた。法事か何かで、老師のあとについて、しずしずと町をあるく姿など、画に描いたように気高くて、自分もあんな風にしてみたいというのが、ほんとの動機だった。

《杉森久英著『天皇の料理番』より》

このように憧れを持つと我慢できなくなる徳蔵が、再び憧れに突き動かされる出来事が起こります。徳蔵の家は鯖江の三十六連隊の将校集会所の賄いをやっており、陸軍記念日に徳蔵が集会所の食堂をのぞくと、見たこともない料理が並んでいました。

ゆかりの地
（県内）越前市　鯖江市
（県外）東京都

写真提供：高瀬物産外食文化 vol5
1993年2月号平成5年2月24日発行

田辺軍曹は大きな庖丁でカツレツを手際よくいくつかに切ると、箸をそえてくれた。

徳蔵は一口食べてみて

「うわッ……こりゃうまいもんやなあ。わしはこんなうまいもん、これまでに食うたことがないわい」

と嘆声をあげた。

《杉森久英著『天皇の料理番』より》

この体験からコックになることを決意し、上京。徳蔵19～20歳の時のことでした。見習いは下働きばかりでつらいものでしたが、この仕事に関しては、どんなことがあっても情熱が失せることはありませんでした。

episode 2

天皇の食事や晩餐会の料理をつくる責任者に

徳蔵は料理修業をするうちに、本場で勉強がしたくなり、明治42（1909）年、ヨーロッパへ渡航。差別やいじめを受けながらも必死で働き、やがて世界屈指とされるフランスの一流ホテルに入り、さらに修行を積みます。

そして、再び大きな転機が訪れます。本格的なフランス料理の料理長を探していた宮内省に、パリの日本大使館が徳蔵を推薦したのです。徳蔵は帰国し、大膳寮の初代厨司長として大正天皇即位の大典で、諸外国の賓客を見事なフランス料理でもてなしました。以降、宮内省の厨司長（後に主厨長）としての人生を歩み、子どもの頃からの憧れを追い求めるその性格が、料理の一皿一皿に実を結んでいったのでした。

晩年まで料理を続けた徳蔵は、84歳で現役を引退。2年後にその生涯を閉じますが、その間には、西洋料理を学ぶ者のバイブルともなった1600ページに及ぶ『仏蘭西料理全書』をはじめ、数々の著書を発刊しています。その中の『味』からは、天皇を敬愛する徳蔵の思いを知ることができます。

私が一生のうちで、いちばんみじめな思いをしたのは、戦争末期から終戦後の被占領時代にかけてであったろう。

陛下の思召しによって絶対にヤミのものを買ってはいけないことになっていたので、食事の材料の乏しさには、ほとほと困ってしまった。（中略）

陛下はたいそうお痩せになった。食物のせいというより、御心配のためであったとお察しするが、食がお進みにならないのには、実に胸を痛めた。（中略）

役人どもも、上の方の連中は、いろいろなルートから市中にない食品を手に入れて、うまいものにはこと欠かない者が多かった。

そういう状態を見聞きすると、それと宮中のみじめな有様と引き較べて、腹の中が煮えくり返るようであった。

食欲のお進みにならない陛下に、何とかしておいしいものをさしあげたい、栄養のあるものを召しあがって頂きたい。あけくれ考えることはそれだけであった。

《秋山徳蔵著『味』より》

※宮内省（くないしょう）…皇室関係の事務を取り扱った官庁（現在は宮内庁）。
※大膳寮（だいぜんりょう）…かつての宮内省の料理を司る部局。

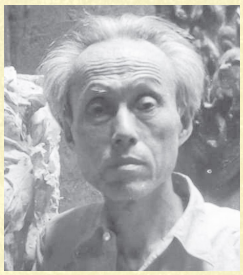
check for 秋山 徳蔵

杉森久英『天皇の料理番』読売新聞社　集英社
秋山徳蔵『味』東西文明社　中央公論新社
秋山徳蔵『舌』東西文明社　中央公論新社
秋山徳蔵『料理のコツ』有紀書房　中央公論新社
秋山徳蔵『味の散歩』産経新聞社　三樹書房　中央公論新社

こぼれ話

徳蔵の随想などの著書には、回想の記述も多く、面白いエピソードがたくさん登場します。そうした徳蔵をモデルにして描いた小説、杉森久英著『天皇の料理番』は、何度もテレビドラマ化され、フィクションの部分もあるものの、徳蔵の情熱やエピソードが生き生きと描き出されました。

雨田光平



1893年～1985年

日本のロダンとも呼ばれた彫刻家。芸術に多彩な才能を発揮し筝曲家、ハープ奏者としても活躍。筝曲は京極流2代目宗家を襲名。

どんな子だった？

幼い頃から育まれた、文化や芸術への素養

光平は、紙問屋を営む薄金次助の次男として、福井市内の相生町（毛矢町）で生まれました。父は、かつて由利公正（P126参照）に仕えて長崎にいたことがあり、出島の自由な雰囲気や文化について、子どもたちに語り聞かせていました。そうした父の影響を受けた光平は、少年時代から筝や三味線、謡曲を習い、また、落語や狂言に興味を示すなど、文化的な素養を身につけて育ちます。

旧制福井中学校（県立藤島高校）時代は落語に魅了され、落語家を志しますが、父の反対で断念。がっかりした光平でしたが、学校で美術教師に「立体的な感覚を持っている」と言われたことをきっかけに、彫刻家への道を歩み始めます。

episode 1

彫刻家として名誉あるスタートと葛藤

明治44（1911）年、光平は東京美術学校（東京芸術大学）に成績トップで入学し、在学中の5年間を特待生で過ごしました。卒業の年に制作した作品「女の顔」は、第10回文展に入選し、彫刻家として名誉あるスタートをきります。

しかし、光平の心には、写実性を重視する政府主催の展覧会への反発が次第に強くなり、大正9（1920）年、妻を伴って渡米。サンフランシスコで暮らし始めます。光平はこの時の思いを後に日記に綴っています。

大正五年私の父がなくなった年に嫂にモデルになってもらって、文展に「女の顔」を出品して文展の買上品になった。私はそれに乗ってその作風を完全すべきか甚だ迷った。私はどうしても世間的の寵児になっておられなかった。（中略）

米国に行きたいと考えたのは全く誰にならったのでもなかった。（中略）

益々自分の思うなりに生きて見たい念願にかられて、それが塑造にまで影響し、どうにもならない生活の否曲が毎々に現われて、その態度が全く先生方の信用まで失墜させ、せっぱつまってその抜け道のため米国に渡ったようなものである。

《『雨田光平記念館コレクション図録』より》

ゆかりの地
（県内）福井市　越前町織田
（県外）東京都豊島区池袋
アメリカ合衆国　フランス

写真提供：雨田一孝氏所蔵

episode 2

光平の芸術性を高めたハープとの出会い

アメリカに渡った光平は、そこで弦楽器のハープと出会い、魅了されます。幼い頃から箏や三味線に親しみ、また、美術学校時代に有名な箏の演奏家の弟子であった光平が、同じ弦楽器のハープに強い興味を抱いたのも、自然な流れだったと言えるでしょう。

大正14（1925）年、光平はフランスに渡り、彫刻の勉強をしながらハープの第一人者マルセル・トゥルニエに入門。興味を持ったものをとことん追求する性格の光平は、ハープも一流の師につき、熱心に学びました。

昭和4（1929）年、フランスから帰国すると、翌年には絵画の作品を発表するとともに「構造社展」という展覧会で彫刻を発表。人間の内面を表現するのではなく、形そのものを自立させた大胆な作品は、当時の批評家たちの意見を二分するものとなりました。

一方、音楽の分野では、帰国2年後に箏曲京極流の2代目宗家を襲名。また、ハープの演奏活動も行い、日本アルプ（ハープ）協会の設立に力を注ぎます。光平は音楽についても日記にこう記しています。

諸藝術の内で音楽程不思議な魅力を持つ藝術はない。その領域は全くこの世の常のものではない。現実を夢幻にし、夢幻の中に天上のエクスタシを将来する。最も時間的であり乍ら、最も空間的なイマジネーションを齎す。考えようでは、全く音楽程つかみようのない美はないと思う。思想と云うには啓示的でありすぎる。それ程清冽な水の如き直観の世界を現出する藝術はない。

《『雨田光平記念館コレクション図録』より》

昭和20（1945）年4月、光平は戦災を避けて故郷の福井市へ疎開しますが、そこも戦災と震災に見舞われます。そして、4年後、ようやく制作を開始し、震災記念碑のレリーフを手始めに、公共施設などに数多くのレリーフを制作。また、現在、福井県立美術館にある岡倉天心（P168参照）の像や、福井市中央公園にある岡田啓介の像、柴田神社の柴田勝家（P36参照）の像、小浜市中央公園の梅田雲浜（P162参照）の像など、先人の像の制作にも情熱を傾けました。

光平は岡倉天心を〝日本美術界の大指導者〟として尊敬し、昭和37（1962）年に福井市で開催された天心生誕100周年記念事業では、光平が天心の句に曲を付けて、箏曲京極流に仕立てた「岡倉天心遺詠」を初披露しています。

彫刻や絵、箏、ハープなど、多彩な才能を開花させた光平。それらはすべて切り離して考えられるものではなく、彼自身の中では密接に関係づけられていました。光平にとってハープは箏を立てて弾くようなものであり、また、彫刻についても「ハーモニーがあって、音楽をやったことで、とても彫刻にプラスになった」と、ある新聞の取材に際して語っています。

晩年は、越前町織田で陶芸家をしていた弟子のもとを訪れ、自らも陶作を行いました。そうした縁で、光平が92歳で亡くなった後に、作品や資料が町に寄贈され、現在、雨田光平記念館で光平の足跡をたどり、作品に親しむことができるようになっています。

check for 雨田 光平

『雨田光平記念館コレクション図録』雨田光平記念館
『ふるさと福井の人々』福井市教育委員会
『20世紀ふくい群像』上　福井新聞社
『雨田光平展　ー福井が生んだ彫刻家の足跡ー』福井市美術館
雨田光示『竪琴の調べ　父・雨田光平について』海越出版社

こぼれ話

彫刻家として顔の骨格や肉付きの研究をした光平は、いろいろな顔の真似をする百面相が得意でした。お酒の場で隠し芸にヒトラーやチャップリンの物まねをして周囲を楽しませました。また、フランスにいた時には、映画に出演して小遣いを稼いだこともありました。

平泉澄（ひらいずみきよし）

1895年～1984年

日本のアジール論を初めて研究した歴史学者、文学博士。東京帝国大学教授を退官後平泉寺白山神社（勝山市）宮司となる。

どんな子だった？

『古事記』や百人一首を読み聞かされ、読書好きの少年に育つ

澄の父は、平泉寺（勝山市）の白山神社で神官をしていました。澄の名は白山を開いた泰澄（P8参照）に由来しています。

古くから白山信仰の拠点であった平泉寺白山神社は、12世紀に比叡山延暦寺の末寺となり、戦国期には焼討ちされるまで宗教都市として栄え、江戸時代には幕府などから330石の寺領を与えられた神社です。こうした由緒ある環境の中で、澄は父から尊王思想を学び、勝山藩士の娘である母から武士の気風を受け継いで成長。また、『古事記』や百人一首を読み聞かされて育った澄は、病弱ながら日本や中国の古典に親しみ、歴史や地理が好きで特に歴史考証に興味を持つ少年でした。

episode 1

日本を愛し、歴史を通して日本のあるべき姿を見つめる

大野中学校（県立大野高校）時代の澄は、読書と瞑想にひたる一方、政治や社会の動きにも強い関心を持ちました。明治43（1910）年、天皇暗殺計画の首謀者たちが処刑された大逆事件を契機に、同じ意見を持つ十時※（内山）進と親友になり、その翌年、十時進とともに意見書を大野中学校長に提出しています。大逆事件のような思想は何としてもくい止めなければならないと考えたのでした。

明治44（1911）年、無試験で第四高等学校（金沢大学）に進学。そこで歴史への興味をさらに深めて『白山平泉寺史』をまとめました。澄は、平泉寺の背後にそびえる経ケ岳と橋本左内（景岳）（P30参照）を意識した「平泉寺経岳」のペンネームを用いています。

その後、東京帝国大学（東京大学）国史学科に入学。「中世に於ける社寺の社会的活動」を卒業論文として大学を首席で卒業すると、大学院に進み、次々と論文を発表。中世史家として成長を遂げ、28歳の時、帝国大学の講師となります。当時の澄は、伝統的な考※証史学を踏まえ、精神文化を歴史認識の中心に置いて時代を捉える歴史観を持っていました。また、この頃の論文で、日本におけるアジール論の研究を発表しています。アジールとは侵すことのできない神聖な場所を意味し、中世に入って社寺は治外法権を持ち、全く特殊な位置にあったというものです。澄はアジール論の先駆者でもありました。

ゆかりの地
（県内）勝山市
（県外）東京都

写真提供：平泉隆房氏所蔵

また、昭和に入る頃からは、過去の崇高な人格や偉大な功業を歴史に復活させるべきとして、歴史を回顧の形で捉える立場を取り始めます。それは楠木正成から水戸光圀、吉田松陰、橋本左内へと継承されてきた「国家護持の精神」だとするものでした。そうした考えに対しては反対意見も起こり、歴史は歴史家ではなく社会の要請、普通人の期待に沿うべきものであるという批判を浴びます。

しかし、澄は昭和5（1930）年、国の派遣で欧州に留学し、著名な歴史学者と交わり、さらに国家主義の立場を鮮明にしていきます。当時、学生の間に社会主義思想が浸透し、その防止のため文部省の要請で日本思想史講座が設けられ、澄が講座を担当することになったのです。また、自身が経営した私塾においても、模範となる歴史的人物を通して、日本人はいかに生きるべきかが語られました。

episode 2

天皇を中心とした国家主義と第二次世界大戦

昭和20（1945）年、第二次世界大戦の戦火が本土に及び、劣勢が明らかになる中でも、澄は全国各地の軍関連の学校や部隊で講演を続けました。8月6日、広島に原子爆弾投下、翌日にはソ連が参戦し、事態は緊迫の度合いを増していました。澄のもとには教え子の士官の訪問が相次ぎ、また、自らも情報収集のため内務省や宮内省、陸軍省に出かけたり、書状を通じて軍の上層部に自分の意見を伝えたりしました。そして、10日には、天皇制存続を前提としたポツダム※宣言受諾をいち早く知り、12日には、連合国が日本の無条件降伏を承諾したとの報に接します。

これに対して澄は、天皇制の存続を保証されない限り、応諾はできないと考え、戦いを遂行する戦略と兵器の有無を軍部に問い合わせます。しかし、その返答は空しいものでした。

8月15日の天皇による玉音※放送の前日、澄は海軍首脳部の訪問を相次いで受けています。自著の『悲劇縦走』には、その時のことが次のように記されています。

> 終戦と同時に処置すべき、重大事、いろいろ御相談はあり、いづれもそれまで面識が無かったのに、国の前途、そこまで見通して心配して下さった事、感銘に堪へず、僭越ながら全力をつくしますと、お答へしたのでありました。その夜、終戦の勅語、御放送の予定でありましたが、何かの事情で、明日に延引と承りました。
>
> 《平泉澄著『悲劇縦走』より》

そして15日、澄は東京帝国大学教授の退官届を提出。21日には平泉寺に戻りました。以後、表舞台に立つことはなくなりますが、東京と平泉寺を行き来し、数々の講演旅行を行い、また、75歳の時には大著『少年日本史』を発行しました。

神官の子に生まれ、天皇が治める日本の国家を心から思い、歴史を見つめ、そして、人生の半分は日本の国家主義化と同じ時を歩んだ澄。その生涯は、昭和59（1984）年、89歳で幕を閉じ、平泉寺白山神社で約2千人の会葬のもと葬儀が行われました。

※十時進…清滝神社宮司の家に生まれ、後内山を名乗る。京都帝大を首席で卒業し、母校の大野中学校長となった。
※考証史学…根拠を明示して論証する立場、史料考証を重視する。
※ポツダム宣言…全日本軍の無条件降伏等を求めた全13条から成る宣言。
※玉音放送…昭和20（1945）年8月15日正午、天皇が終戦を直接国民に伝えたラジオ放送。

check for 平泉 澄

平泉澄『物語日本史（上）（中）（下）』講談社学術文庫
平泉澄『山彦』勉誠出版
平泉澄『首丘の人　大西郷』錦正社
平泉澄『少年日本史』皇學館大学出版部
平泉澄『我が歴史観』皇學館大学出版部
平泉澄『悲劇縦走』皇學館大学出版部
若井敏明『平泉澄』ミネルヴァ書房

こぼれ話

澄の著書『少年日本史』の中に「誠実に父祖の辛苦と功業とを子孫に伝え、子孫もまたこの精神を継承して進むことを期待しつつ」という一節があります。同書は未来を担う若い人たちに、日本の歴史を知ってほしいという思いで執筆され、そして、今も名著として多くの人に愛読されています。